

五十川 赤目遺跡

—— 南区五十川に所在する五十川遺跡群の第1次調査 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第363集

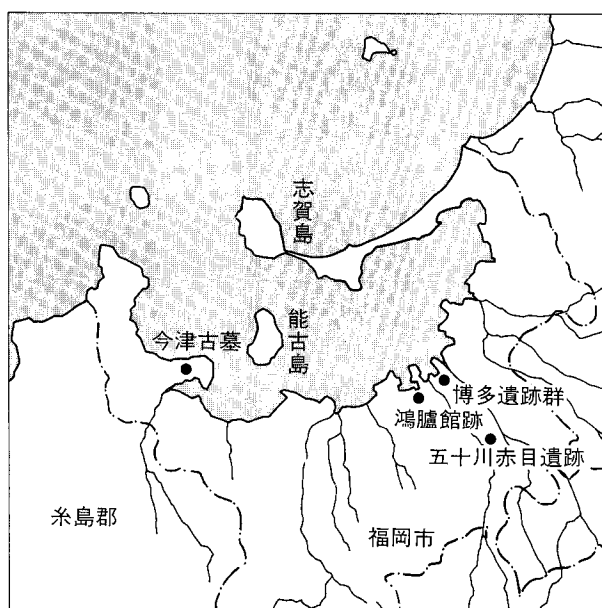
1994

福岡市教育委員会

五十川赤目遺跡

—— 南区五十川に所在する五十川遺跡群の第1次調査 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第363集



1994

福岡市教育委員会

序 文

原始、古代より大陸文化の交流の玄関口として栄えた博多湾岸には各時代に亘って多くの遺跡が存在しています。本市教育委員会では、これらの埋蔵文化財についての保存・保護に努め、各種の開発事業に伴っては記録保存のための発掘調査を行っています。

本書に報告する五十川遺跡は奴国の拠点的役割を負った比恵・那珂遺跡に隣接する遺跡ですが、従来では五十川高木遺跡、赤目遺跡、野間遺跡等の発掘調査例しか無いため、歴史的な変遷が明らかではない地域のひとつでした。

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、五十川遺跡第1次調査に相当します。調査の結果、縄文時代～鎌倉時代までの遺構・遺物を発見し、貴重な資料を得ることができました。

発掘調査から資料報告に至るまでに、ご協力を賜りました関係者に対して感謝の意を表します。

又、本書が埋蔵文化財の保護に対するご理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例 言

1. 本書は民間の共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和54(1979)年1月22日から同年3月10日の期間中に発掘調査を実施した五十川赤目遺跡の第1次調査報告である。
2. 五十川赤目遺跡の第1次発掘調査は井澤洋一が担当した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は、井澤、常松幹雄、松尾 修、入江誠剛、中富一夫、池田孝弘、森本和男、高倉浩一、永見 英、松田慎一、松風 満、中川原裕之が行った。
4. 遺物の実測は、池田(孝)、牛房綾子、吉田扶希子、廣嵯 香、松尾正直が行った。
5. 遺構実測図の製図は牛房、遺物実測図の製図は吉永祐美子、池田洋子、井澤が行った。
6. 遺構の写真撮影は井澤が行い、遺物の写真撮影は、池田(孝)が行った。
7. 本書に掲載する遺構一覧表は牛房、池田(孝)が作成した。
8. 遺構番号は発掘調査中に於て検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSK(土壙)、SE(井戸)、SD(溝)、SP(ピット)である。
9. 本書の遺物番号は通し番号で示し、図版番号に一致させている。
10. 遺構に用いた方位は磁北である。
11. 本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収録・保管される予定である。
12. 本書作成に当たって、吉田扶希子、福田小菊、多田映子、田中昭子、三浦明子の協力を得た。
13. 本書の執筆は第1章と第2章～第5章の一部を井澤が、第2章～第5章を池田(孝)が行った。
14. 本書の編集は牛房と池田(孝)の協議により、井澤が行った。

遺跡調査番号	7 8 0 9			遺 跡 略 号	G J K
地 番	福岡市南区大字五十川字赤目98番1			分布地図番号	板付24
開 発 面 積	1,449m ²	調査対象面積	1,449m ²	調 査 面 積	1,449m ²
調 査 期 間	1979年(昭和54年)1月22日～1979年(昭和54年)3月10日				

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の経過と概要	5
1. 調査経過	5
2. 土層	5
3. 遺構・遺物解説	6
(1)土壙 (SK) 及び出土遺物	6
(2)井戸 (SE) 及び出土遺物	16
(3)溝 (SD) 及び出土遺物	16
(4)ピット (SP) 及び出土遺物	29
(5)整地層及び出土遺物	32
(6)その他の遺物	45
第5章 まとめ	46

挿図目次

Fig. 1 五十川遺跡と周辺の遺跡 (縮尺 1/50,000)	3
Fig. 2 五十川遺跡第1次調査現況測量図 (縮尺1/2,000)	4
Fig. 3 第1次調査遺構配置図 (縮尺1/300)	7
Fig. 4 調査区周壁の土層実測図 (縮尺1/120)	8
Fig. 5 土壙 (SK) 実測図 (縮尺1/40・1/30)	9
Fig. 6 土壙 (SK) 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	10
Fig. 7 土壙SK38出土遺物実測図① (縮尺1/3)	13
Fig. 8 土壙SK38出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/1)	14
Fig. 9 井戸SE01実測図 (縮尺1/40)	17
Fig. 10 井戸SE01出土遺物実測図 (縮尺1/3)	17
Fig. 11 溝SD03・06・10土層実測図 (縮尺1/40)	19
Fig. 12 溝SD03出土遺物実測図 (縮尺1/3)	19
Fig. 13 溝SD06出土遺物実測図① (縮尺1/3)	21

Fig.14	溝SD06出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/4)	22
Fig.15	溝SD06出土遺物実測図③ (縮尺1/2・1/3)	24
Fig.16	溝SD10出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/6)	27
Fig.17	溝SD10・11出土遺物実測図 (縮尺1/3)	29
Fig.18	ピット (SP) 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	31
Fig.19	整地層出土遺物実測図① (縮尺1/3)	32
Fig.20	整地層出土遺物実測図② (縮尺1/3)	33
Fig.21	整地層出土遺物実測図③ (縮尺1/3)	36
Fig.22	整地層出土遺物実測図④ (縮尺1/3)	37
Fig.23	整地層出土遺物実測図⑤ (縮尺1/3)	38
Fig.24	整地層出土遺物実測図⑥ (縮尺1/3)	39
Fig.25	整地層出土遺物実測図⑦ (縮尺1/3)	40
Fig.26	整地層出土遺物実測図⑧ (縮尺1/3)	42
Fig.27	整地層出土瓦類実測図 (縮尺1/3)	43
Fig.28	整地層出土石製品実測図 (縮尺1/2・1/3)	44

図 版 目 次

PL. 1	(1)北側調査区全景 (南から)
	(2)南側調査区全景 (南から)
PL. 2	(1)溝SD03・04・06、井戸SE01 (南から)
	(2)井戸SE01 (北から)
	(3)井戸SE01土層状態 (東から)
	(4)井戸SE01内木製品出土状態
PL.3	(1)溝SD06 (北東から)
	(2)溝SD07発掘作業風景 (北西から)
	(3)溝SD07 (北から)
	(4)溝SD07土層状態 (南から)
PL. 4	(1)溝SD05 (西から)
	(2)南側調査区作業風景 (西から)
	(3)南側調査区遺構群 (南から)
	(4)溝SD03・10・11、土壙SK38 (北から)
PL. 5	(1)溝SD10 (北から)

- (2)溝SD10内遺物出土状態（東から）
- (3)溝SD10内出土須恵器蓋（南から）
- (4)溝SD10土層状態（北から）
- PL. 6 (1)土壙SK35（南から）
- (2)土壙SK35内遺物出土状態
- (3)土壙SK38（東から）
- (4)整地層内遺物出土状態（西から）
- PL. 7 土壙（SK）出土遺物
- PL. 8 井戸（SE）・溝（SD）・整地層出土遺物
- PL. 9 整地層出土遺物
- PL.10 (1)整地層出土遺物及び表採遺物
- (2)発掘調査協力者及び作業員の皆さん

表 目 次

Tab.1	五十川遺跡周辺調査地一覧表……………	5
Tab. 2	五十川遺跡第1次調査遺構一覧表 ……	48

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

当該地は那珂川右岸の低丘陵地帯に位置し、旧地番は南区五十川赤目98-1に相当する。昭和50年代当時、住居地域に指定されているこの地域は大型開発が少なく、農村型の集落を形成していた。当該地の旧地目は水田である。

昭和53年9月1日付で、開発計画事前審査願が市長に提出されたことに伴い、文化課(当時)では稲刈り後の11月7日に試掘調査を実施した。

試掘調査は申請地の1,449㎡全域を対象として、4本のトレンチを設定した。耕作土、床土の下から、黒褐色粘質土の弥生時代～鎌倉時代の包含層、及び黄褐色、又は暗褐色粘質土の上面において溝、ピット等を検出したため、申請地の全域が遺跡であることが判明した。

以上の結果にもとづき、事業主の谷健誠氏、及び錦義建設株式会社との間において調査費用負担、並びに調査期間の協議を重ねた。調査費の原因負担により、発掘調査を、昭和54年1月22日から3月10日まで実施した。

2. 発掘調査の組織

調査委託 事業主 谷健誠

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 社会教育部文化課(当時)・文化財部埋蔵文化財課(現在)

調査総括 文化課長 清水義彦(当時)・埋蔵文化財係長 三宅安吉(当時)

庶務 木村義一(現在、教育委員会総務課係長)

発掘調査・試掘調査 井澤洋一

整理報告 井澤洋一(現在、埋蔵文化財課主任文化財主事)

整理作業 牛房綾子、池田孝弘(以上調査員)、池田洋子、吉永祐美子、福田小菊、多田映子

調査協力者 谷健誠、錦義建設株式会社、〔地元〕蒲池尚武、内野栄次郎、八尋辰雄、進藤トシ子、真鍋ミワ、進藤カオル、谷ツチ子、中村京子、谷妙子、森山キヨ子、山根キミエ、富永千里、富永妙子、谷ミネ子、進藤フデノ、谷ホマレ、大神和子、谷謹守、谷美津子、木山真由美、〔明治大学〕森本和男、高倉浩一、松田慎一、永見英、〔福岡大学〕松尾修、阿部典広、池田賢一、今泉雄二、中富一夫、松風満、江口政徳、中川原裕之、〔西南学院大学〕池田孝弘、入江誠剛、小山田政光、不老敏悦、松尾亨、中条正憲、池松千富、〔早稲田大学〕常松幹雄、〔その他〕辻哲也、池松直子

発掘調査から整理作業に至るまで、上記の関係者を含め、多くの方々にご協力をいただいたことを記し、感謝の意を表したい。

第2章 遺跡の立地と環境

福岡市の南部に広がる福岡平野は、那珂川、御笠川、諸岡川等の河川の沖積作用によって形成された逆三角形の平野である。花崗岩風化礫層を基盤とし、その上に約3万年前に噴出したと推定される阿蘇火砕流による白色粘土（八女粘土）と、黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム）が広く分布して、標高10～30mの中位段丘が形成される。そのひとつで、那珂川と諸岡川に挟まれた那珂丘陵は、春日市の春日丘陵に始まり、福岡市比恵附近まで延びている。

五十川遺跡群是那珂丘陵のほぼ中央に位置し、北是那珂遺跡群、南は井尻遺跡群に挟まれる。東には独立丘陵である諸岡遺跡群や板付遺跡、三筑遺跡、北東には那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡、那珂久平遺跡があり、南西には那珂川を挟み大橋E遺跡、三宅遺跡群などがある。

五十川赤目遺跡は、五十川遺跡群の中央部から東端に位置しているが、この地域には北に開口した浅い谷が形成されており、当該調査地点は、谷の北西側緩斜面に相当する。発掘調査前の地目は水田であり、当該地の標高は9.1mを測る。周辺の台地との比高差は約0～1.9mを測る。五十川遺跡跡群では発掘調査例は少なく、当該地のほか、山陽新幹線工事に伴う発掘調査（五十川高木遺跡）及び当該地に隣接している五十川遺跡の第2次調査の2ヶ所である。

五十川高木遺跡（井尻A遺跡）

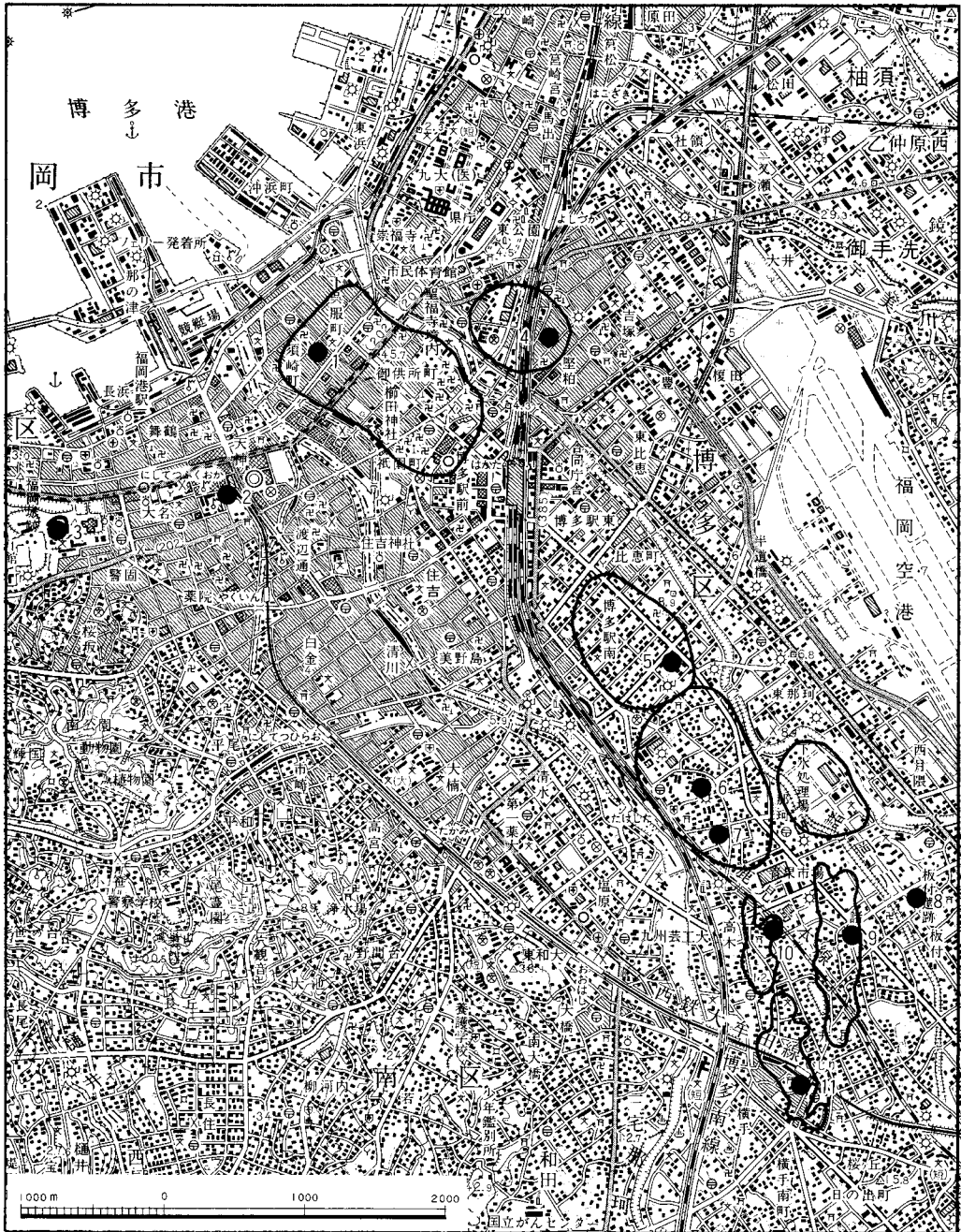
昭和46年9月から同47年2月までの期間に、山陽新幹線建設工事に伴い発掘調査を行った。12～13世紀に比定される集落遺跡である。遺構は竪穴住居跡、井戸跡、溝、ピット等の遺構の他、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、瓦質土器、土師質土器、国産陶器などが出土した。

五十川遺跡（第2次調査）

本遺跡の北西に隣接する。昭和58年4月25日から6月18日までの期間に、民間の宅地開発に伴い発掘調査を行った。弥生時代前期末の竪穴住居跡、古墳時代前期～後期の竪穴住居跡・井戸跡・竪穴遺構、奈良時代の掘立柱建物跡・溝状遺構、中世期の掘立柱建物跡・溝状遺構などを検出している。遺物は弥生式土器、土師器、須恵器、青磁器、鉄滓、磨製石鏃などが出土した。

五十川妙楽寺遺跡

当該地の南西150m程の台地上に位置している。銅銚鑄型、石剣などが発見されている。弥生時代後期の遺跡と思われる。



- | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 博多遺跡群 | 4. 堅粕遺跡 | 7. 那珂遺跡群 | 10. 五十川遺跡群 |
| 2. 肥前堀跡 | 5. 比恵遺跡 | 8. 板付遺跡 | 11. 井尻B遺跡群 |
| 3. 鴻臚館跡 | 6. 那珂八幡古墳 | 9. 諸岡A遺跡群 | |

Fig.1 五十川遺跡と周辺の遺跡 (縮尺1/50,000)

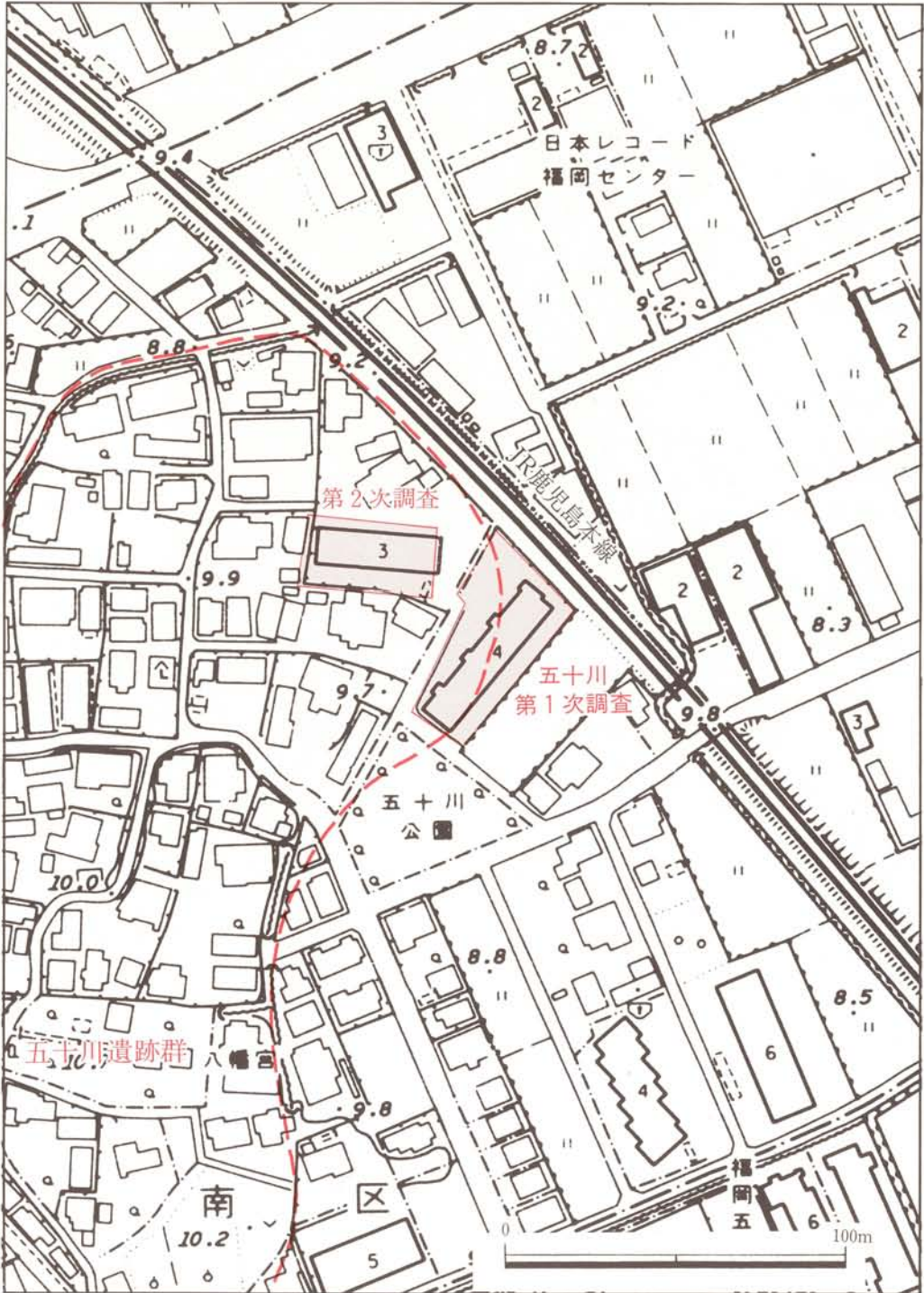


Fig.2 五十川遺跡第1次調査現況測量図 (縮尺1/2,000)

第3章 調査の経過と概要

1. 調査経過

発掘調査は昭和54年1月22日から同年3月10日まで実施した。排土、及び残土処理の関係から調査区を北と南の2つに分けて行った。

北側調査区は遺跡全体の約2/3の広さで、調査は1月22日から2月14日まで行った。南側調査区を排土処理場とした。遺構は整地層上面では検出できないため黄褐色土層の上面を遺構面とした。遺構面は西側に傾斜し、西側ではより厚く整地層が堆積している。遺構の遺存状況は西側のほうがより良好で、東側では削平によりピットなどもあまり検出できなかった。遺構は井戸1、土壇1、溝6条、ピットを検出した。溝は全てがほぼ北東～南西に延びている。溝SD03は南側調査区に続いている。溝SD07は同じく南側に伸びており、北側では一部を確認した。SD07は旧河川と考えられる。SD06からは豊富な遺物が出土した。

南側調査区の調査は2月19日から3月10日まで行った。広さは北側調査区の半分程度であったが、調査期間中は全般的に雨や雪が多く、また、溝SD07において湧水が著しいため機械力を投入して調査を行った。遺構は溝SD03・07を中心として、新たに4条の溝、土壇6基、ピットを検出した。溝SD07はコの字形に廻っていることが判明した。北側境界地にある土壇SK38からは多くの遺物が出土した。SK38は完形の土師器、須恵器、瓦などが集中して出土したことから重要な遺構と思われたが、境界地にあるため、調査は不十分に終わった。

2. 土層

当該地の旧地目は水田である。土層は大略、第I層・耕作土、第II層・床土、第III層・黒褐色粘質土層、第IV層・黄褐色シルト層、第V層・灰黒色シルト層、第VI層・淡黒灰色砂質土層、第VII層・砂層の層序となる。第III層の黒褐色粘質土は東側に堆積しておらず、南側に厚く堆積しているところから、丘陵の浅い谷部を埋め立てたものと思われる。上面では遺構を検出することはできなかったが、中国青磁・白磁等が散見できるので、中世の掘立柱建物等の小規模な遺構が存在したものと考えられる。包含層に含まれる遺物は多量であり、磨滅したものも多い。縄文時代から平安時代までの土器、石器、土師器、須恵器を含んでおり、特に9世紀前後の須恵器、赤焼け土器、甗、移動式竈片を多く含んでいることは、この整地層の形式時期を示すものである。遺構面は第IV層の黄褐色シルト層であるが、調査区東側では検出されず、第V層の

Tab. 1 五十川遺跡周辺調査地一覧表

遺 跡 名		所 在 地	面 積	調 査 期 間	事 業 名	時 代
旧遺跡名・回数	現遺跡名・回数					
五十川高木遺跡	井尻A遺跡	福岡市南区五十川高木1丁目	500㎡	1971(昭和46年)9月～1972年(昭和47年)2月	山陽新幹線線路建設工事	平安時代～鎌倉時代
五十川赤日遺跡第1次調査	五十川遺跡第1次調査	福岡市南区五十川字赤日98番1	1,449㎡	1979(昭和54年)1月22日～3月10日	民間宅地開発	縄文時代晩期～鎌倉時代
五十川赤日遺跡第3次調査	五十川遺跡第2次調査	福岡市南区五十川2丁目99, 100, 569	660㎡	1983(昭和58年)4月25日～6月18日	民間宅地開発	弥生時代前期末～中世
五十川野間遺跡	諸岡A遺跡群第1次調査	福岡市南区五十川野間63-1	975㎡	1979(昭和54年)3月5日～4月10日	民間宅地開発	古墳時代初頭～中世

灰黒色シルトが遺構を形成する。但し、この第V層では遺構が非常に少なく、且つ削平を受けて遺存状態の悪い溝SD05、及びピットを検出することにとどまった。第V層のシルト層の下は淡黒灰色砂質土層の薄い堆があり、その下は砂層を形成している。旧地形図をみるかぎり御笠川の蛇行の形跡を認めることができるので、旧河川縁辺の沖積化によって形成された台地縁辺部に当該地は位置するものと考えられる。

3. 遺構・遺物解説

本遺跡からの遺構には、土壙(SK)、井戸(SE)、溝(SD)を検出した。そのほかの柱穴状の穴についてはピットとした。遺物が出土したピットについてのみ通し番号を付した。土壙と井戸は当初は通し番号を付けていたが、整理作業段階において土壙はSKに、井戸はSEに改めた。

(1) 土壙 (SK) 及び出土遺物

土壙は全部で7ある。縄文時代に属するもの1、弥生時代に属するもの1、古墳時代に属するもの3、奈良時代に属するもの2である。SK01を除き、他は調査区の南西に集中する。

SK01 (Fig. 5)

調査区の北西端に位置する。最大長は73cm、最大幅は69cm、深さ23cmを測る。平面形は楕円形で、断面形は逆梯形をなす。弥生式土器の甕、土師器の高坏・甕・椀が出土した。

遺物 (Fig. 6)

土師器・高坏 (1・2) 1は脚部片で、裾部はラップ状に開く。内外面ともにナデ調整。色調は橙色を呈する。胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成は良好である。2は口縁部片である。内面はヨコハケ調整、外面はタテハケ調整を行い、口縁端部のみ内外面ともヨコナデ調整する。赤褐色を呈す。胎土に少し砂粒を含む。焼成は良好である。4世紀前半頃。

SK30 (Fig. 5)

最大長は76cm、最大幅は70cm、深さ48cmを測る。平面形が不整隅丸方形で、断面形は箱型をなす。大型の柱穴かもしれない。覆土から弥生式土器片、土師器の高坏・甕、須恵器の皿・坏・坏蓋、赤焼け土器片などが出土した。9世紀前半頃。

遺物 (Fig. 6)

須恵器・皿 (3) 内面はヨコナデ調整、外面は口縁部がヨコナデ調整、底部がナデ調整である。小片であるため器形の復原はできなかったが、直径13cm、器高2cm位になると思われる。須恵器の生焼けである。白灰色を呈する。胎土に砂粒を少し含む。

SK31 (Fig. 5)

最大長は70cm、最大幅は64cm、深さ39cmを測る。平面形が不整円形で、断面形は箱型をなすが、SK30と同じく、大型の柱穴の可能性はある。覆土から弥生式土器片、土師器の壺などが出土したが、いずれも細片であり図示できなかった。古墳時代前期。

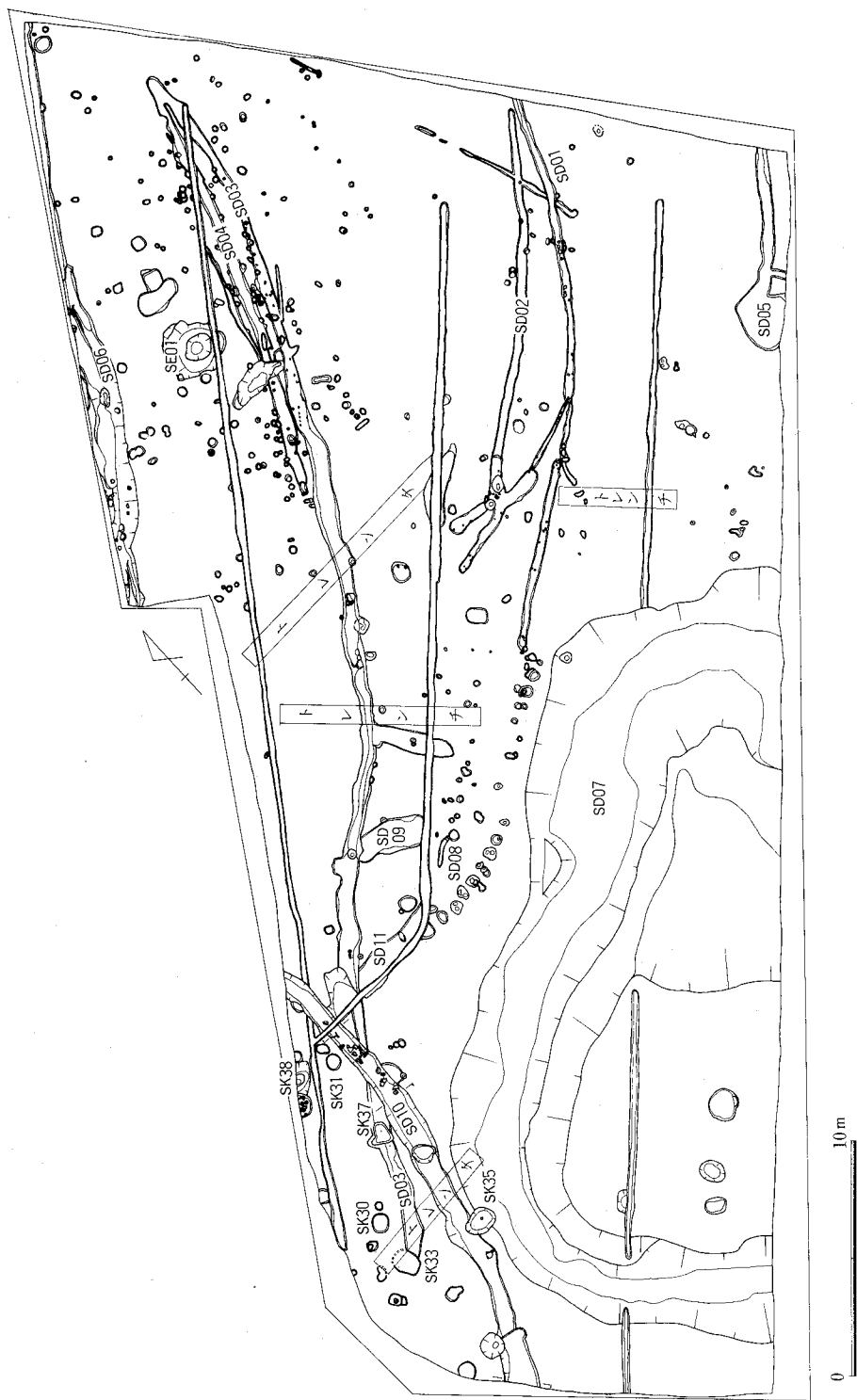


Fig.3 第1次調査遺構配置図 (縮尺1/300)

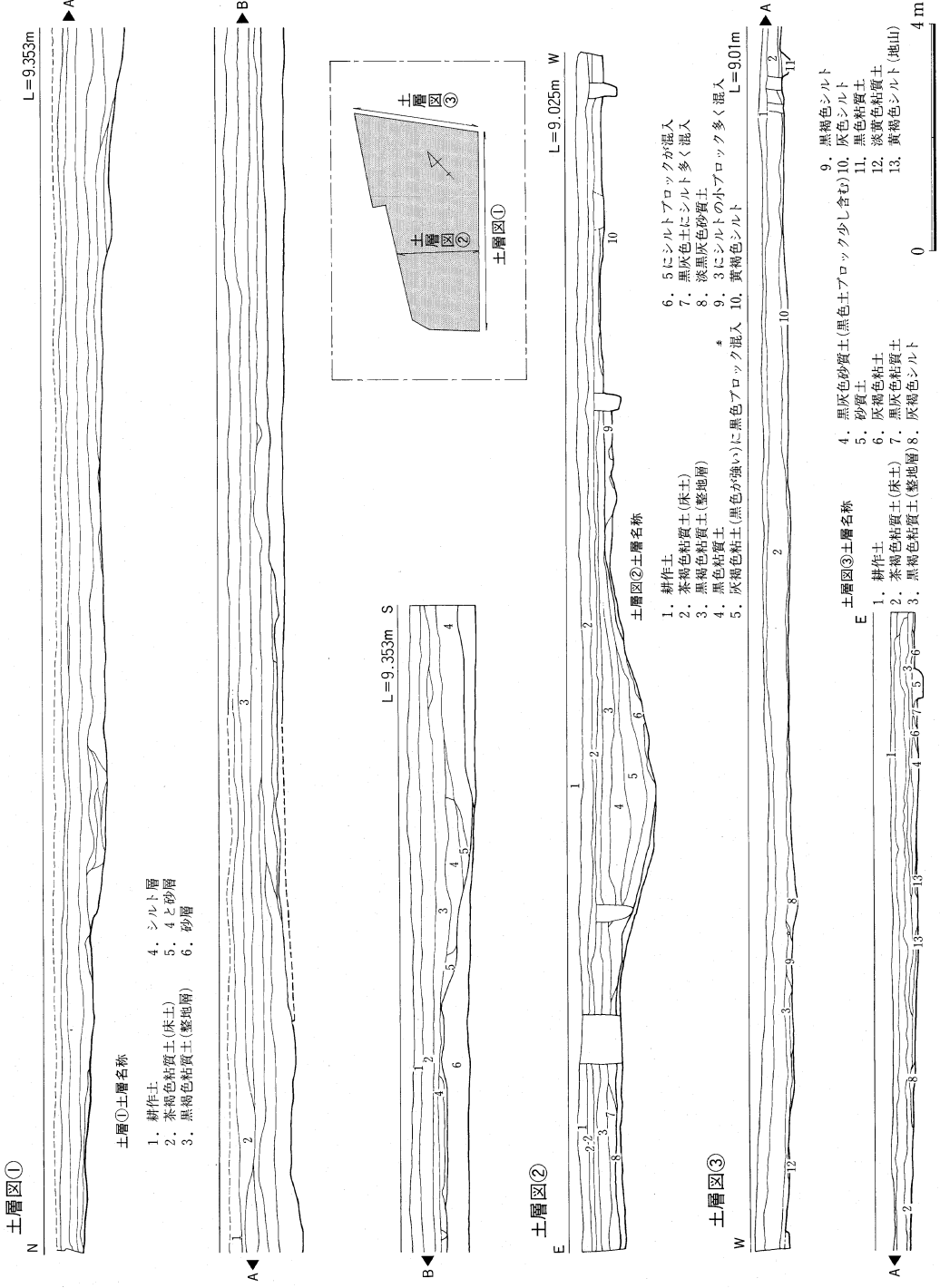
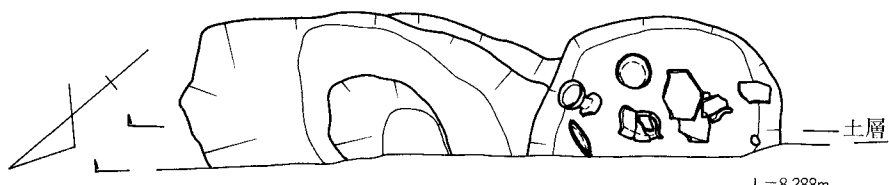
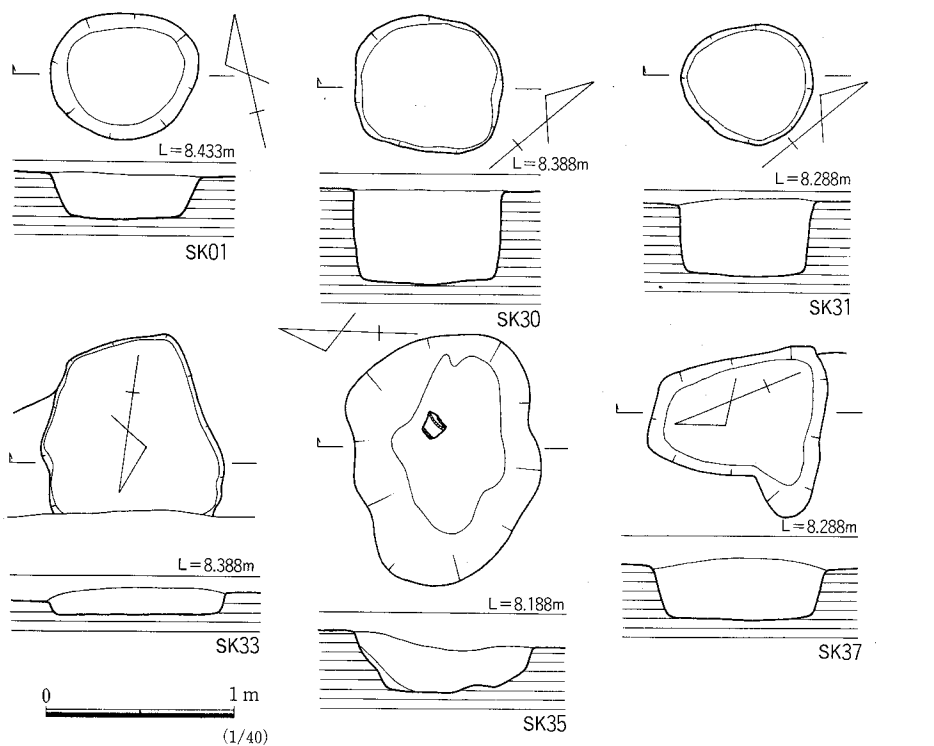


Fig.4 調査区周壁の土層実測図 (縮尺1/120)



SK38土層名称

1. 黒色粘質土に褐色土を含む
2. 黒色粘質土に褐色土を僅かに含む
3. 黒色砂層
4. 3と黒色粘質土
5. 黒色粘質土に白色粘土混入
6. 青白色砂層(堅い)
7. 淡茶色粘質土
8. 黒色粘質土と淡茶色粘質土の混合土

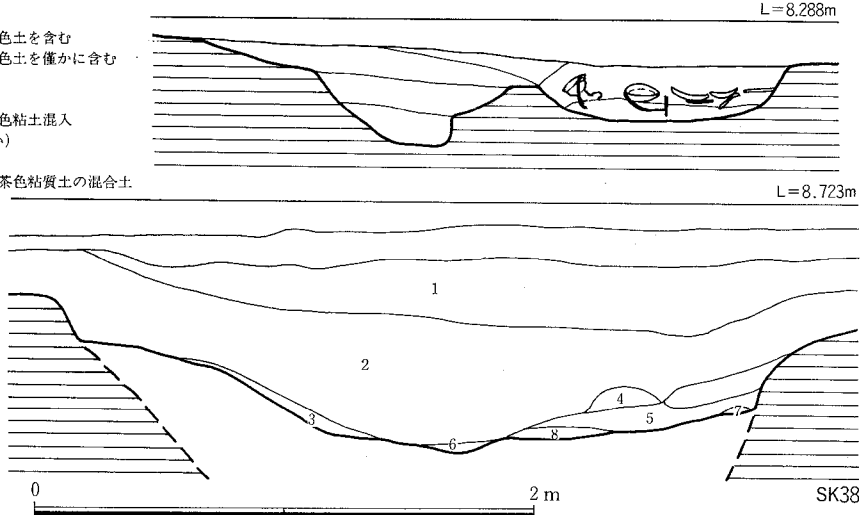


Fig.5 土壙 (SK) 実測図 (縮尺1/40・1/30)

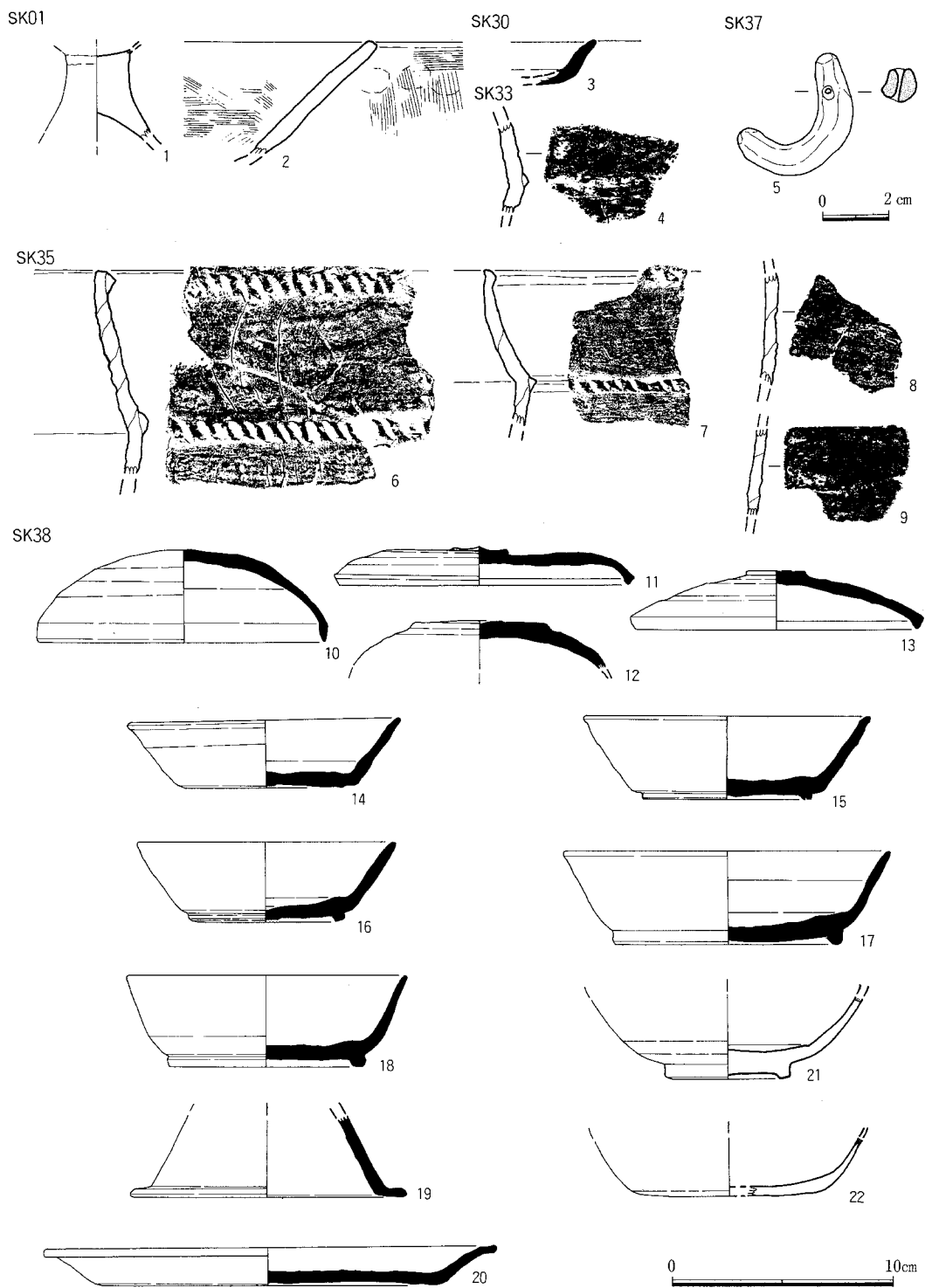


Fig.6 土壙 (SK) 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SK33 (Fig. 5)

最大長は95cm、最大幅は90cm、深さ15cmを測る。平面形が不整隅丸長方形である。既に上部の大半が削平され、底部のみ検出した。溝SD03に切られる。縄文式土器の甕、弥生式土器片が出土した。弥生時代の遺構と思われる。

遺物 (Fig. 6)

縄文式土器・甕 (4) 胴部片である。屈曲部に低い三角突帯を貼り付け、刻目を施す。口縁部は内傾する。外面は貝殻条痕文の後にナデ調整、内面はナデ調整である。淡茶褐色を呈する。

SK35 (Fig. 5 PL. 6)

最大長は133cm、最大幅は97cm、深さ33cmを測る。平面形が不整楕円形で、断面形は不整の逆梯形を呈する。覆土は黒色粘質土である。底面から夜臼式土器の甕が出土した。溝SD10に切られる。縄文時代晩期。

遺物 (Fig. 6 PL. 7)

縄文式土器・甕形土器 (6~9) 6と7は口縁部外面と胴部の屈曲部に刻目突帯を貼り付ける土器で、共に口縁部は内側に傾斜する。6の外面はヨコナデ調整、内面は横方向への貝殻条痕の後、部分的にヨコナデ調整を施す。外面は黒色、内面は淡茶褐色を呈す。焼成は良好。外面に煤が付着する。7の外面はナデ調整、内面は屈曲部より上部がナデ調整、下部が貝殻条痕文である。外面は黒色、内面は茶褐色を呈す。焼成は良好である。外面に煤が付着する。8・9は胴部片である。8の内面はナデ調整、外面が貝殻状痕文、9は内外面ともナデ調整である。8・9は内面が淡茶褐色、外面が黒褐色である。焼成は良好である。

SK37 (Fig. 5)

最大長は91cm、最大幅は62cm、深さ36cmを測る。平面形は不整隅丸長方形を呈する。溝SD03と切り合っている。土師器片、土製の勾玉が出土した。古墳時代前期。

遺物 (Fig. 6 PL. 7)

土製勾玉 (5) 半弓状に強く曲がっている。全長4.1cm、最大径1.2cm。孔は両方から開けられ、孔径0.4cmを測る。

SK38 (Fig. 5 PL. 6)

南側調査区の西側壁に沿って検出した。西半分が調査区外のため全体形は不明であるが、不整隅丸長方形と考えられる。最大径は2.4m、現存幅は約60cm、深さ約20cmを測る。当初、壁に沿って長さ約2.5mの落ち込みを確認したため、住居跡の可能性を考えていたが、掘り進めるうちに深い2つの土壇となった。南側の土壇から完形品の遺物などが投げ込まれた状態で出土したため、これらをSK38出土遺物とした。遺物は8世紀中頃と思われるものが主体であるが、上層からの出土遺物の中には中世に属すると思われる遺物も含まれるため、SK38と重複して中世の遺構があった可能性がある。縄文式土器片、弥生式土器片、土師器、須恵器甕、須恵器赤焼

け土器片、黒色土器、青磁椀、瓦、移動式竈片、砥石、碁石、黒曜石片、製鉄関連遺物などが出土した。8世紀後半～9世紀前半の遺構と思われる。

遺物 (Fig. 6～8 PL. 7)

10・11・26・27・32・34・35・36・287の他は上層から出土した。

須恵器・坏蓋 (10～13) 10は完成品である。口径13.2cm、器高3.5cmを測る。外面の1/2が左回りの回転へら削りである。天井部は丸みを帯び、天井部と体部との境は不明瞭である。淡茶灰色を呈す。生焼けである。6世紀後半。11も完形品で、口径13.3cm、器高1.3cmを測る。天井部は水平に近い。口縁部の断面は三角形状を呈し、内傾する。つまみは扁平な擬宝珠形である。天井部外面は回転へら削りである。暗灰色を呈す。8世紀中頃。13は口径13cm、器高2.7cm、つまみの径2.6cmを測る。天井部の2/3がへら削りである。つまみは扁平な擬宝珠形で、頂部はわずかに尖る。外面は暗茶灰色、内面は茶灰色を呈す。8世紀中頃。12は口縁部を欠く。天井部と体部の境に段をもつ。青灰色を呈す。8世紀後半。10～13の調整は、内面が不整方向のナデ、口縁部が内外面ともヨコナデである。12の内外面はナデ調整、口縁部付近は内外面ともヨコナデ調整である。10～12の胎土には砂粒を含み、13は砂粒を含まない。焼成は11～13は良好である。

坏身 (14～18) 14は一部を欠くが、ほぼ完形である。口径12.4cm、底径7.2cm、器高3.3cmを測る。体部は直線的にのび、口縁部はわずかに外反する。端部は丸みを帯びる。暗灰色を呈する。15は口径13.1cm、高台径7.8cm、器高3.8cmを測る。高台は底部端より少し内側につく。口縁部はわずかに外反する。灰色を呈す。16は口径11.8cm、高台径6.4cm、器高3.7cmを測る。高台は底部と体部の境につく。茶灰色を呈する。17は口径14.8cm、高台径10.2cm、器高4.3cmを測る。高台は底部と体部の境につく。口縁部は少し外反する。底部と体部の境は丸く仕上げる。灰白色を呈す。18は口径13cm、高台径8.9cm、器高4.2cmを測る。高台は底部と体部の境につく。断面形は四角形を呈す。底部と体部の境は丸みを持ち、口縁部はわずかに外反する。灰白色を呈する。調整は14～17の体部が内外面ともにヨコナデ調整、内底部は不整方向のナデ調整である。底部はへら起こしである。18は内底部が不整方向のナデ調整で、他は磨滅のため不明瞭である。14・16・17・18は胎土に砂粒を含み、15は含まない。焼成は14が良好、15・16がややあまく、17・18が不良である。14は8世紀後半、15～18は8世紀中頃。

高坏 (19) 脚部片である。底部径12.4cm、現存高3.8cmを測る。裾部は屈曲し、外側に開く。内外面ともにヨコナデ調整である。外面は暗灰色、内面は灰色を呈す。胎土に砂粒を少し含む。焼成は良好である。8世紀中頃。

皿 (20) 口径20.4cm、底部径14.9cm、器高1.7cmを測る。底部と体部の境は丸みを持ち、体部は外反気味に立ち上がる。口縁部は外側に屈曲し、端部を上方へ少しつまみ上げる。底部は回転へら削りである。体部は内外面ともにヨコナデ調整、内底部はナデ調整である。暗灰色を呈

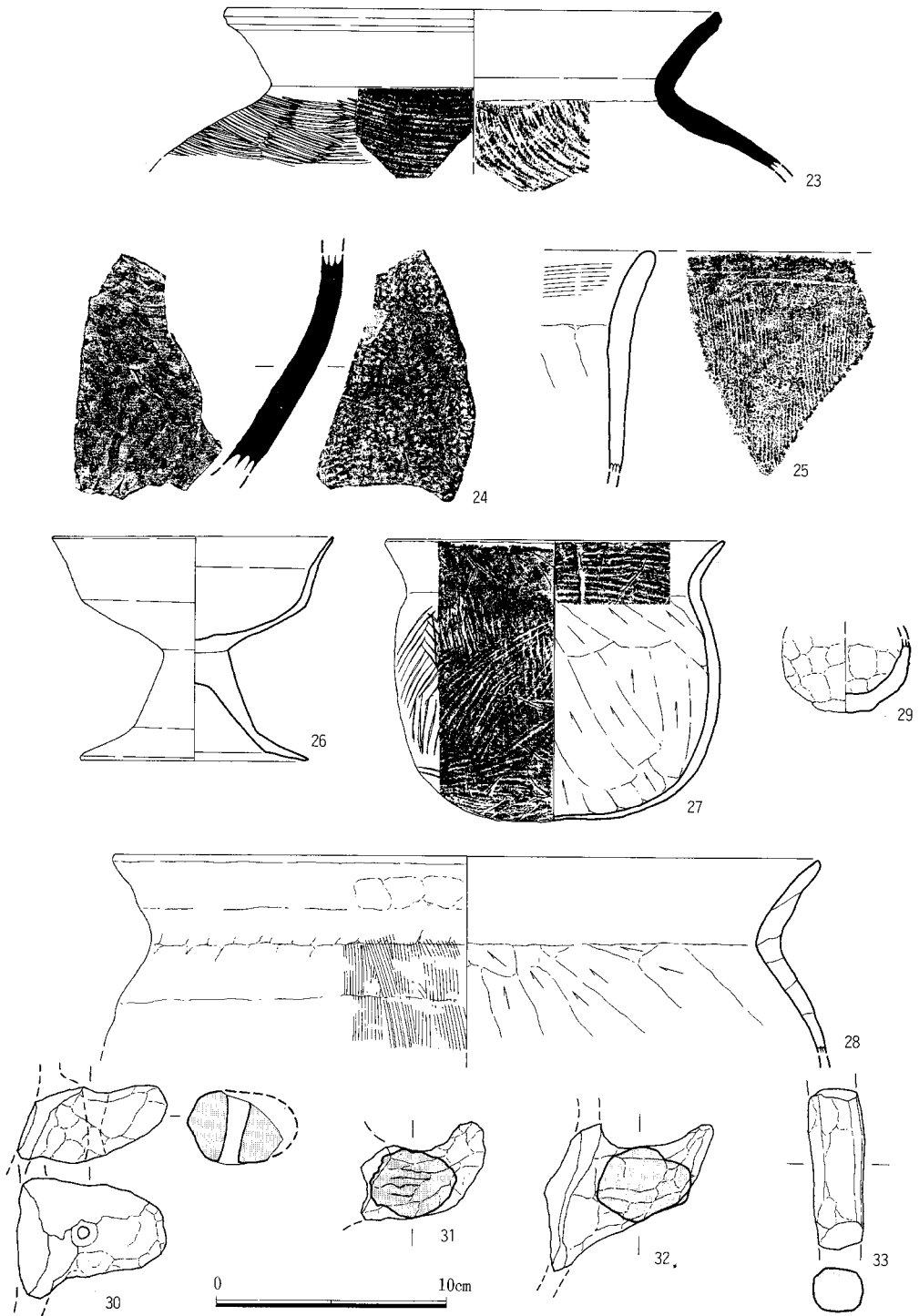


Fig.7 土壙SK38出土遺物実測図① (縮尺1/3)

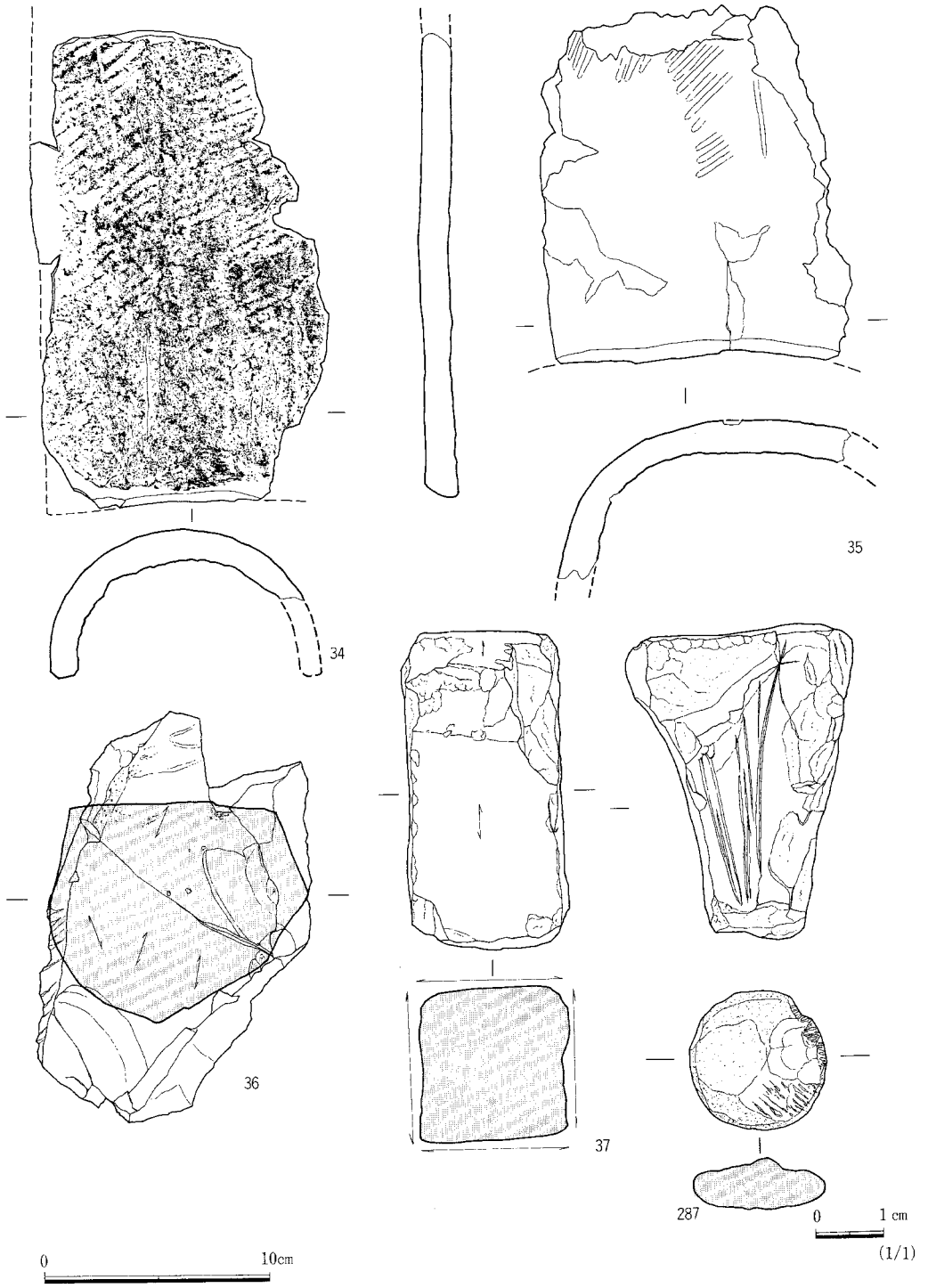


Fig.8 土壙SK38出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/1)

す。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好。8世紀中頃。

甕 (23・24) 23は口径21.6cm、現存高7cmを測る。口縁部はくの字形に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。口縁端部外面に沈線を施す。体部の外面は平行タタキで、内面には同心円の当て具痕がある。口縁部はヨコナデ調整である。暗灰色を呈す。胎土に砂粒を少し含む。焼成は良好。8世紀。24は体部の破片である。外面は格子目タタキ、内面は青海波の当て具痕である。

土師器・甗 (25・30~32) 25は口縁部片である。口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。体部外面はタテハケ調整、内面は部分的にヨコハケ調整がみられるが、大部分は磨滅のため不明瞭である。口縁部はヨコナデ調整である。外面は黒色~淡い茶色、内面は淡い茶色を呈す。胎土に砂粒を多く含む。焼成はややあまい。30~32は把手である。30は長さ6.5cm、幅4.1cm、厚さ3.2cmを測る。中央部に上部径12mm、下部径9mmの穴が貫通する。穴は両方からの穿孔である。薄茶色を呈す。31は長さ5.5cm、幅3.7cm、厚さ3.1cmを測る。基部にハケ調整がみられる。黒灰色~茶褐色を呈す。32は貼り付けである。長さ5cm、幅4.1cm、厚さ3.2cmを測る。焼成は3点とも良好である。

高坏 (26) 完形品である。坏部の口径12.5cm、脚部の径10.3cm、器高10cmを測る。坏部は底部と体部の境に強い段を持ち、口縁部は外反する。脚部には段を持ち、裾部は強く開く。大部分が磨滅しているが、内外面ともに部分的にナデ調整がみられる。筒部はヨコ方向のナデ調整である。色調は明赤褐色を呈す。胎土に砂粒を含む。焼成はあまい。6世紀前半。

坏 (22) 底径7.2cm、現存高2.4cmを測る。口縁部を欠く。底部はへら切りである。胎土に砂を含まない。焼成は良好。8世紀。

甕 (27・28) 27はほぼ完形品である。口径15cm、器高12.2cmを測る。脚部は扁平気味で、口縁部はくの字状に外反する。胴部外面はハケ調整で、口縁部はタテハケの後、ヨコナデ調整を施す。胴部内面はへら削りで、口縁部はヨコハケ調整である。淡茶褐色を呈す。胎土に細かい砂粒を多く含む。焼成はややあまい。8世紀中頃。28は口径31cm、現存高10.5cmを測る。くの字形の口縁部をもつ。内面の屈曲部には稜をもつ。体部内面はへら削り、外面はタテハケ調整を施す。口縁部は内外面とも磨滅している。淡褐色を呈す。胎土に1~3mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。8世紀。

手捏器 (29) 小型の椀である。底部は丸味を持っており、現存高3.3cmを測る。内外面ともに指圧痕が残る。外面は茶褐色、内面は黒色を呈す。焼成は良好。

白磁・椀 (21) 底部片である。釉は青味をもった透明釉で、高台内側まで施す。内底見込に沈線がある。

瓦類・丸瓦 (34・35) 34は現存長21.6cm、弧深5.3cm、厚さ1.5cmを測る。背部は平行タタキで部分的にナデ調整がみられる。谷部には1mm幅の布目痕がみられる。淡茶灰色を呈す。胎土

に砂粒を多く含む。焼成は不良で、脆い。35は現存長16cm、厚さ1.3cmを測る。背部はナデ調整で、平行タタキの痕跡がわずかにみられる。谷部にはへう削りの跡がみられる。暗茶褐色を呈す。胎土に砂粒を多く含む。焼成は不良で非常に脆い。

製鉄関連遺物 (33) 両端が欠けている。現存長6.8cm、最大幅2.3cmを測る。断面形は角丸の四角形である。全面ナデ調整である。胎土に砂粒を多く含む。淡茶褐色を呈す。

石製品・砥石 (36・37) 36は最大長18.7cm、最大幅11.5cm、最大厚9.5cmを測る。A面を砥面として利用し、他は粗割り調整のままであるが、左側面にはわずかに研磨の跡がみられる。頁岩質である。37は長さ14.4cm、最大厚7cm、幅6.7cmを測る。A面を主な砥面とし、5面を砥面として利用する。両側面には粗い研磨の跡がみられる。二次的に火を受ける。砂岩製である。

基石 (287) 不整形円形を呈し、最大径2.1cm、最大厚7mmを測る。丁寧な研磨を行っている。黒曜石製である。

(2) 井戸 (SE) 及び出土遺物

SE01 (Fig.9 PL.2)

平面形が不整形円形で、最大径約2.7m、深さ約1.2mを測る。断面形は2段になっており、摺鉢状を呈す。底面の径は約50cmを測り、水平をなす。井戸壁の中位以下は砂質層を掘り込んでいるため、中位以下の壁及び底面には青灰色粘土を貼りつけている。湧水が著しい。弥生式土器片、土師器、須恵器、平瓦、砥石などが出土した。なお杓子状の木器が出土したが、紛失した。13世紀前半頃。

遺物 (Fig.10 PL.8)

土師器・皿 (38) 口径10cm、底部径7.8cm、器高1.1cmを測る。口縁端部は丸味をもち、体部はやや外反する。底部はへう切りで、板目痕がある。内底部はナデ調整、体部は内外面ともヨコナデ調整である。淡茶褐色を呈す。胎土に砂粒を少し含む。焼成は良好。12世紀前半。

須恵器・壺 (39) 頸部片である。頸部径7.2cm、現存長4cmを測る。頸部はゆるやかに外反する。外面はヨコナデ調整で、肩部に自然釉がかかる。暗青灰色で、焼成は良好。

甕 (40) 体部片である。内面は同心円タタキの当て具痕、外面は格子目タタキの後、ヨコ方向のカキ目を施す。

瓦類・平瓦 (41) 厚さ2cmを測る。背部は斜格子のタタキ痕、谷部は粗い布目痕が残っている。焼成はややあまい。灰白色を呈する。

石製品・砥石 (42) 現存長7.5cm、現存幅7.6cm、厚さ6.4cmを測る。3面に使用痕がみられる。硬質砂岩製である。

(3) 溝 (SD) 及び出土遺物

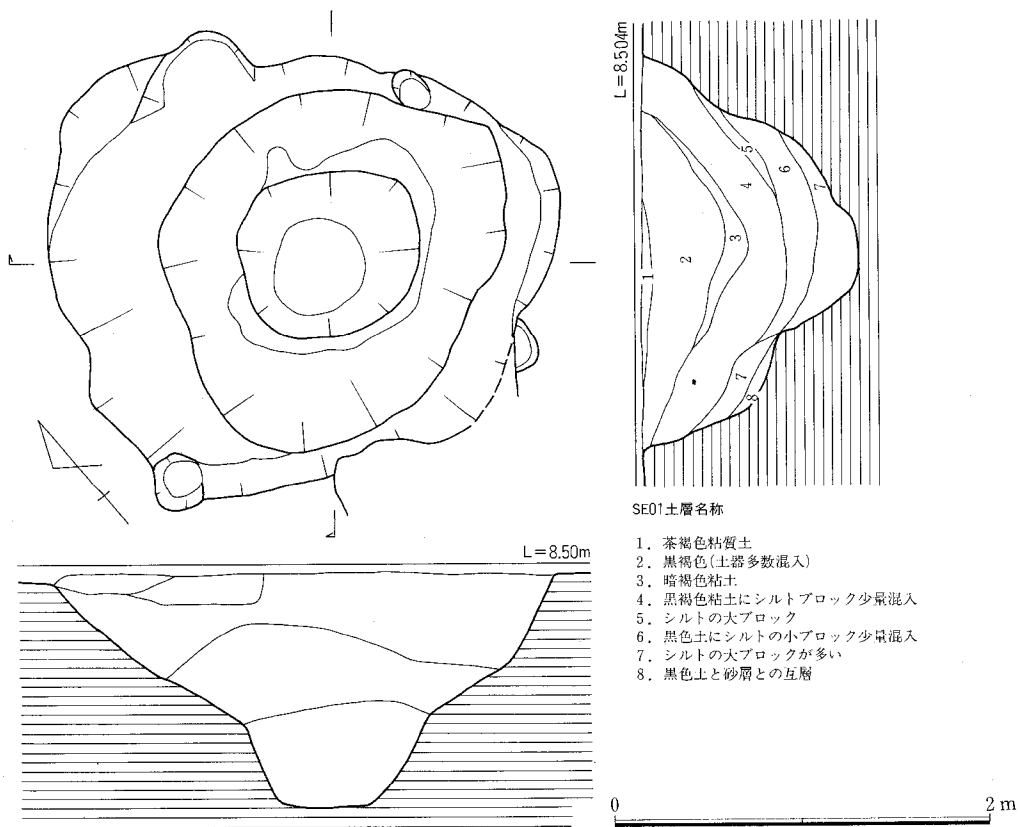


Fig.9 井戸SE01実測図 (縮尺1/40)

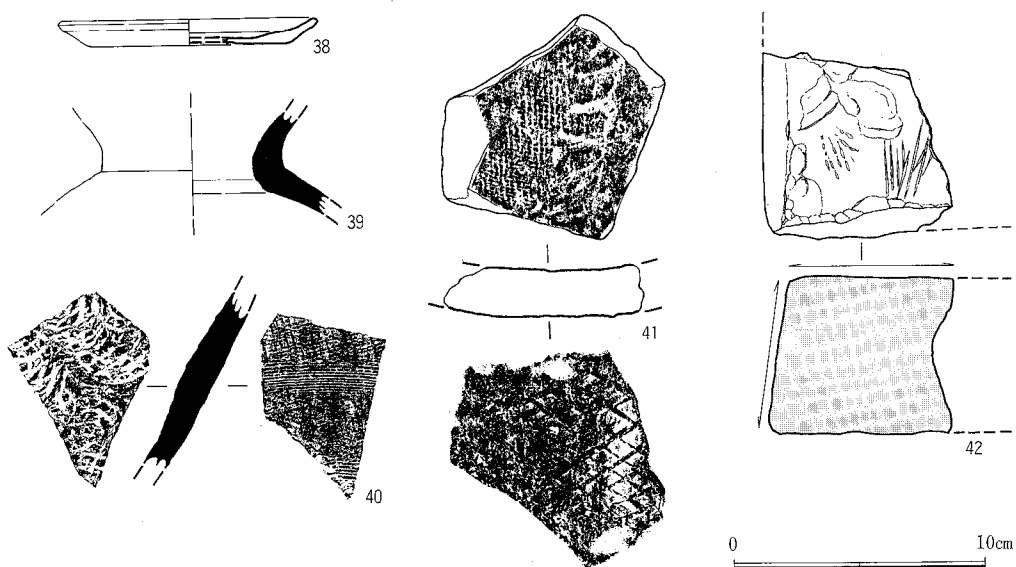


Fig.10 井戸SE01出土遺物実測図 (縮尺1/3)

大小合わせて11条の溝を検出した。古墳時代に属する溝7条、平安時代に属する溝2条、時期不詳の溝2条である。他にも溝状遺構を検出したが、主な溝についてのみ概説する。いずれも上部が削平を受けている。

SD01 (PL.1)

北側調査区のはぼ中央を、北から南西方向に弓状に貫流する細長い溝である。北側に行くに従って徐々に深くなる。中央部において西と東の二方向に分岐する。西側の溝はSD02と交差するが切り合いは不明確である。北端は調査区外となる。現存長24m、幅30cm、深さ10cm前後を測る。土師器高坏・二重口縁壺、須恵器片などが出土した。古墳時代後期。

SD02 (PL.1)

SD01とはぼ平行に南西方向にのびる細長い溝で、北端部においてSD01に最も接近する。また、SD01から分岐した溝と交差する。全長20m、幅40cm、深さ15cm前後を測る。遺物の出土はない。

SD03 (Fig.11 PL.2・4)

調査区中央よりのやや西側をほぼ南北方向に貫流する細長い溝で、全長53m、最大幅95cmを測る。深さは10cm前後であるが、中央部近くでは一部30cmの深さを測る。最も残りのよい部分の断面形は逆梯形で、底面は幅20cmを測り、水平である。覆土は暗黒褐色粘質土にシルトが混入する。溝SD09・SD11・土壙SK33・SK37を切り、溝SD01に切られる。縄文式土器片、弥生式土器壺、土師器甕・皿・長頸壺・高坏・甑、黒色土器椀、須恵器甕・坏・坏蓋・壺・椀、須恵器赤焼け土器片、移動式竈片、瓦器椀、砥石、鉄器片などが出土した。10世紀代である。

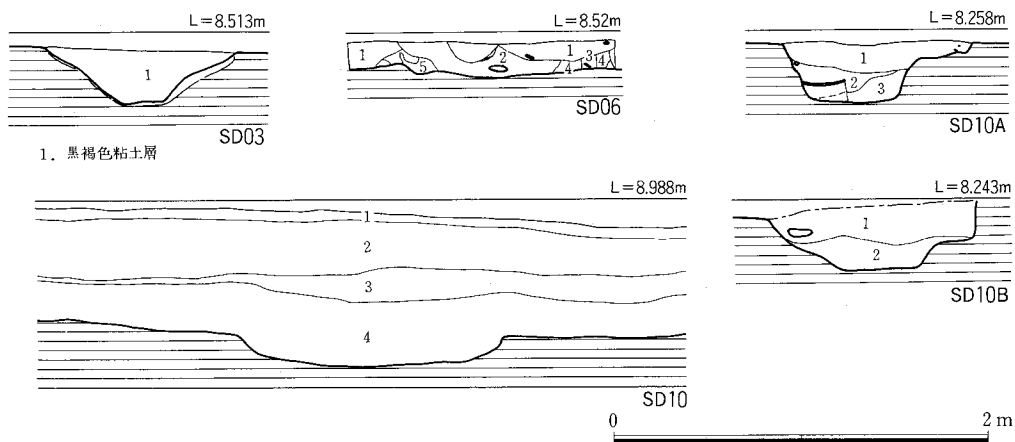
遺物 (Fig.12 PL.8)

須恵器・壺 (43) 底部片である。現存高3.8cmを測る。底部径は約10cmと思われる。高台は底部端に貼り付け、外側に開いている。体部の外面は回転ヘラ削りである。内面はヨコナデ調整、底部は内外面ナデ調整である。淡青灰色を呈す。胎土に細かい砂粒を少し含む。焼成はややあまい。須恵器の生焼けである。8世紀後半。

坏 (44・45) いずれも底部の端よりやや内側に高台がつく。44は断面形がコの字形を呈し、45の高台は、外側に開く。調整は内外面ともヨコナデ調整で、44の底部、45の内底部はナデ調整である。色調は44の内面は茶色、外面はくすんだ青灰色、45は暗青灰色を呈する。ともに胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。44・45は8世紀前半～8世紀中頃である。

土師器・甕 (47) 口縁部は内弯気味に直立し、肩部はなだらかである。長胴形の甕と思われる。外面はナデ調整、内面は口縁部がナデ調整で、胴部がハケ調整である。器厚は薄く、胎土には砂粒を含まない。外面は淡い茶色、内面は淡褐色を呈す。焼成は良好である。

甑 (48) 把手部分で、長さ5cmを測る。断面形は不整円形を呈し、径は3.5～4cmを測る。淡い茶色～淡褐色を呈す。焼成は良好である。



SD06土層名称

1. 黒色粘質土
2. 黒灰色砂質土
3. 黒灰色砂質土
4. 黄褐色粘土
5. 黄褐色粘質土(黒色土ブロック含む)

SD10土層名称

1. 床土
2. 黒色土
3. 黄褐色粘質土(炭・砂含む)
4. 黒褐色粘質土(土器混入)

SD10A土層名称

1. 黒色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土(白色粘土少量混入)

SD10B土層名称

1. 黒色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土

Fig.11 溝SD03・06・10土層実測図(縮尺1/40)

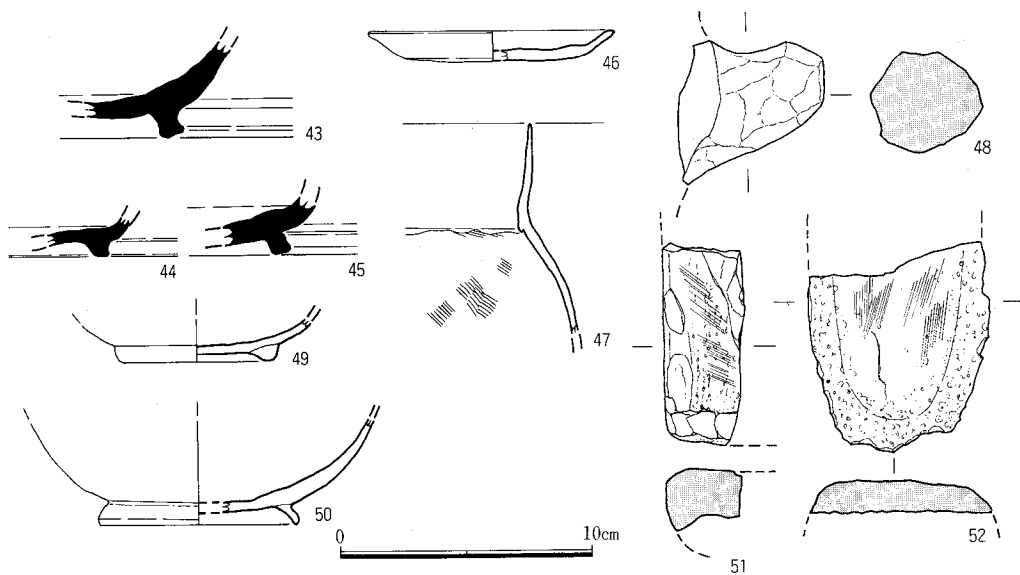


Fig.12 溝SD03出土遺物実測図(縮尺1/3)

皿 (46) 口径10cm、底部径4cm、器高1.3cmを測る。底部はヘラ切りである。口縁部は緩やかに外反する。調整は内外面ともナデ調整である。淡い茶色を呈す。胎土に砂粒をわずかに含む。焼成はややあまい。11世紀代の所産である。

黒色土器・椀 (50) 黒色土器のA類である。底部径8cm、現存高4cmを測る。体部は丸味もっている。高台は薄く、やや外反し、先端部は丸い。内面は黒色にいぶしを施した後、不特定方向のヘラミガミを行う。外面はナデ調整である。内面は黒色、外面は二次火を受け淡茶褐色である。胎土にほとんど砂粒を含まず、焼成は良好である。10世紀。

瓦器・椀 (49) 底部径5.6cm、現存高1.6cmを測る。高台の断面形は不整三角形で、丸みを帯びる。灰色を呈するが、部分的に黒色である。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。13世紀頃。

石製品・砥石 (51) 長方形を呈しているが、大部分を破損している。現存長8.1cm、幅3.3cm、厚さ2.5cmを測る。A面と片方の側面を砥面として利用する。粘板岩製。

磨石 (52) 破片である。現存長8.4cm、現存幅7.4cm、現存厚1.4cmを測る。整地層出土の石器279と接合した。279は剥離面を叩き石として利用しているが、52は自然面のままである。安山岩製。

SD04 (PL.1)

溝SD03に平行してほぼ南北方向に伸びる細長い溝である。SD03と北端部で接合する。全長19m、幅60cm、深さ20cm前後を測る。弥生式土器片、土師器片、須恵器坏蓋が出土した。古墳時代後期と考えられる。

SD05 (PL.1)

調査区の北東端で検出した。北東方向に主軸をとる溝であるが、溝の北端部が調査区外となるため全長は不明である。現存長9m、幅60cm、深さ20cm前後を測る。北側は徐々に深くなる。土師器片が出土した。古墳時代前期と思われる。

SD06 (Fig.11 PL.2)

北側調査区の西側壁に沿って検出した。現存長25m、幅1.2m、深さ20cm前後を測る。溝の大半は調査区外であるため全長は不明である。既に上部は著しく削平されており、溝の底部のみが遺存していた。溝の覆土は上部が黒色粘質土、下部が黒灰色砂質土で、黄褐色粘質土が混入する。遺物は豊富で、縄文式土器甕、弥生式土器の甕・椀・鉢・長頸壺、土師器甕・小型丸底壺・二重口縁壺・支脚・高坏・甑、紡錘車状土製品、紡錘車、砥石、石庖丁、軽石、黒曜石片などが出土した。古墳時代前期。

遺物 (Fig.13~15 PL.8)

縄文式土器・甕 (53) 口縁部外面に刻目突帯を貼り付ける。内面はヨコナデ調整である。内面は明褐色、外側は淡い茶色を呈す。焼成は良好。縄文時代晩期。

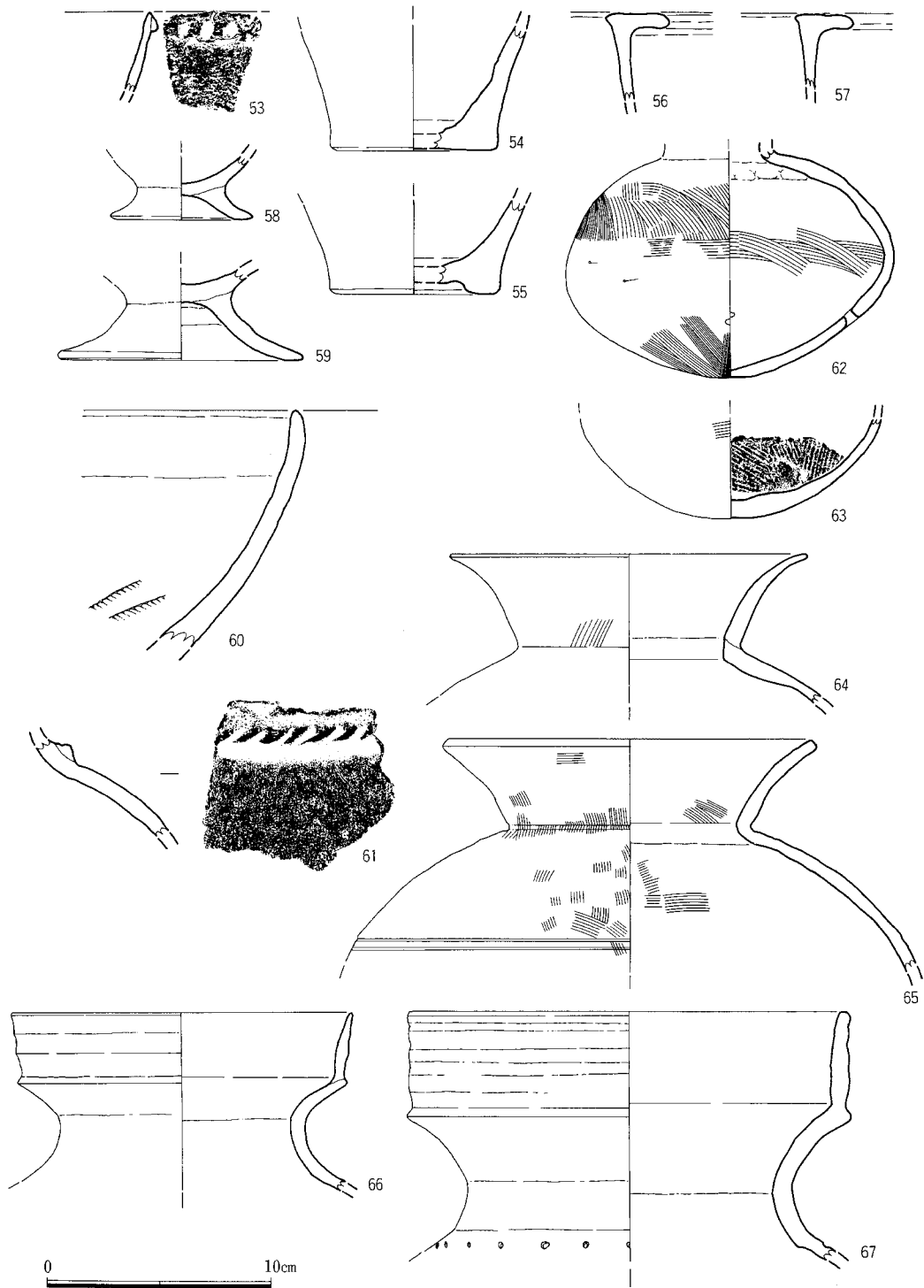


Fig.13 溝SD06出土遺物実測図① (縮尺1/3)

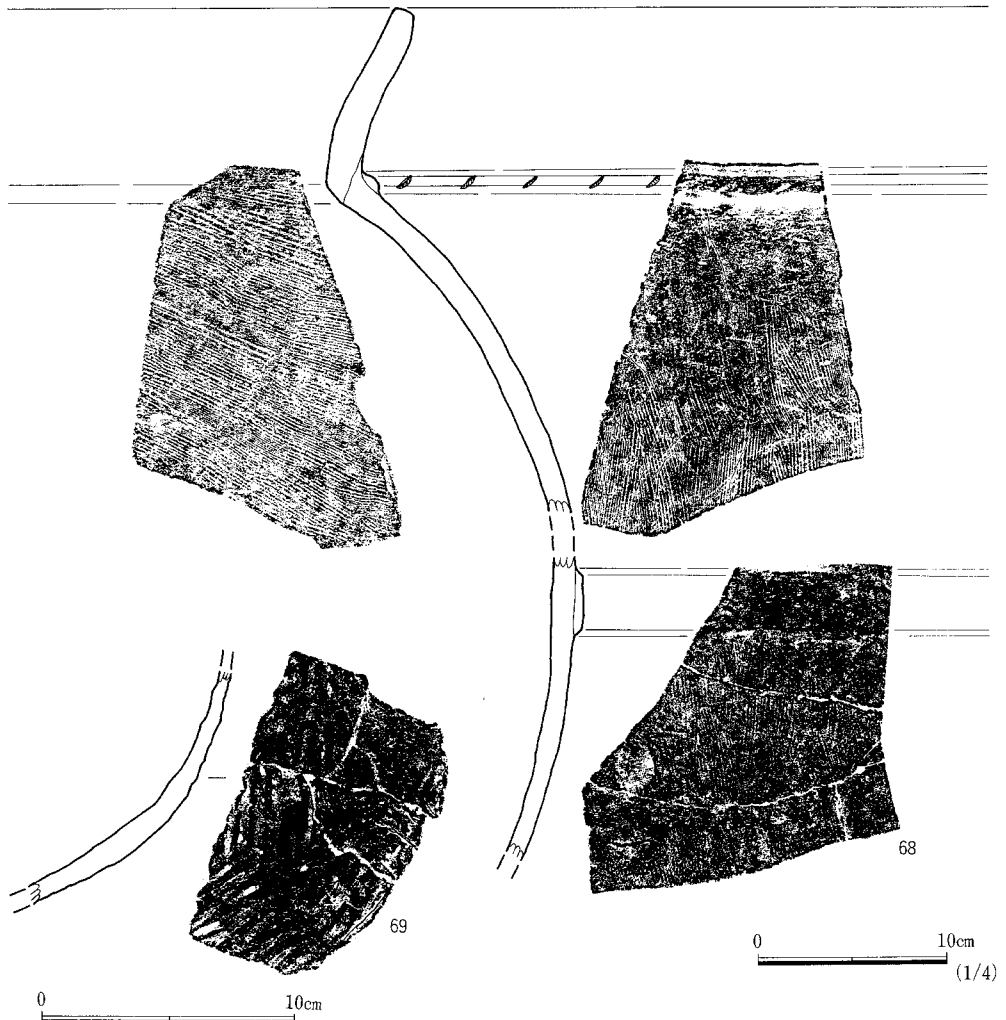


Fig.14 溝SD06出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/4)

弥生式土器・甕 (54~57) 54・55は底部片で、ともに約1/3ほどの破片である。54は底部径7.0cm、現存高5.7cmを測る。底部はわずかに上げ底である。55は底部径6.8cm、現存高8.6cmを測る。底部は上げ底である。色調は54が淡茶褐色、55が褐色を呈し、ともに胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好。弥生時代中期。56・57は逆L字型の口縁部をもつ小型の甕である。57は外面にタテハケ調整が施される。56は淡い茶色を呈し、口縁部に黒斑がある。胎土には砂粒を含む。焼成は良好。57は茶褐色を呈し、胎土に細かい砂を多く含む。焼成はやや不良である。弥生時代中期後半。

脚付土器 (58・59) 鉢形土器の脚部片と思われる。裾部は強く外へ開く。58は底部径5.7cm、現存高2.9cmを測る。内外面はナデ調整である。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。59は胎

土にわずかに砂粒を含む。焼成は堅緻である。

鉢 (60) 現存高10.7cmを測る。体部は丸みを持ち、口縁部が内傾する。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部外面はナデ調整、内面下位はハケ調整が残る。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は不良である。

壺 (61~63) 61は壺の肩部片で、頸部に突帯を貼り付け、刻目を施す。内外面ともナデ調整である。外面は明赤褐色、内面は淡茶褐色を呈し、胎土に細かい砂粒を多く含む。焼成は良好。62は長頸壺である。頸部、及び口縁部を欠く。現存高10.2cm、最大径15cmを測る。体部は扁球形をなす。底部はわずかに底を形成するが、尖底気味で自立できない。底部から1/3程のところに径5mmの穿孔がある。焼成前の穿孔である。外面は上位と下位がタテハケ調整、中位がヨコ方向のヘラミガキで、部分的に丹塗りの痕跡がみられる。内面は上位と下位がナデ調整、中位がヨコハケ調整である。全体的に丁寧なつくりである。淡茶褐色を呈す。体部下位に大きな黒斑がみられる。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。弥生時代終末である。63は底部片で、現存高4.6cmを測る。丸底を呈し、内底面の器壁は厚い。外面はハケ調整、内面は底部から放射状にタテハケ調整を施す。外面は淡茶褐色で、底部に黒斑がみられる。内面は明赤褐色を呈す。焼成は良好である。

土師器・壺 (64~67) 64・65は口縁部である。64は口径15.8cm、現存高6.8cm、65は口径16.6cm、現存高10.6cmを測る。64の口縁部は大きく外反する。口縁端部は薄く、丸みをもたせて仕上げる。65は内弯気味に立ち上がり、端部は強く外反する。口縁端部は厚みを持ち、平坦に仕上げる。64の外面はナデ調整で、口縁部にタテハケ調整が施される。内面はナデ調整である。65の外面はタテハケ調整、内面がヨコハケ調整、口縁端部は内外面ともにナデ調整である。色調は64の外面が淡褐色、内面が黒灰色、65は明赤茶色を呈する。ともに胎土に砂粒を多く含む。焼成は64が堅緻、65がややあまい。66・67は二重口縁壺である。66は口径15.3cm、現存高8cmを測る。口縁部はわずかに外に開く。67は口径19.8cm、現存高11.3cmを測る。口縁部はほぼ直立する。外面の段は強い稜をもつ。67は肩部に径4~5mmの円形の刺突文を施す。66は淡褐色、67は茶褐色を呈する。66は胎土にあまり砂粒を含まない。焼成はともに良好である。古墳時代前期。64~67は3世紀後半~4世紀前半と思われる。

甕 (68~73) 68は大型の甕である。現存高27cmを測る。頸部と胴部に突帯を貼り付ける。頸部の突帯は低い台形で、貝殻による刻目を施す。胴部の突帯は扁平な帯状である。口縁部はゆるやかに外反し、やや内弯する。口縁端部は平坦に仕上げ、突帯部と同じ刻目を施す。体部の内外面はハケ調整である。明茶褐色~淡い茶色を呈し、黒斑がみられる。胎土に大粒の砂を含む。焼成はややあまい。69は土師器の胴部片である。須恵器の土器製作技術をもって作られた土器である。外面は平行タタキ、内面はヘラ削り調整である。茶褐色を呈し、黒斑が一部にみられる。胎土は砂粒を多く含む。70は口径15.4cm、現存高5.5cmを測る。口縁部は内弯気味

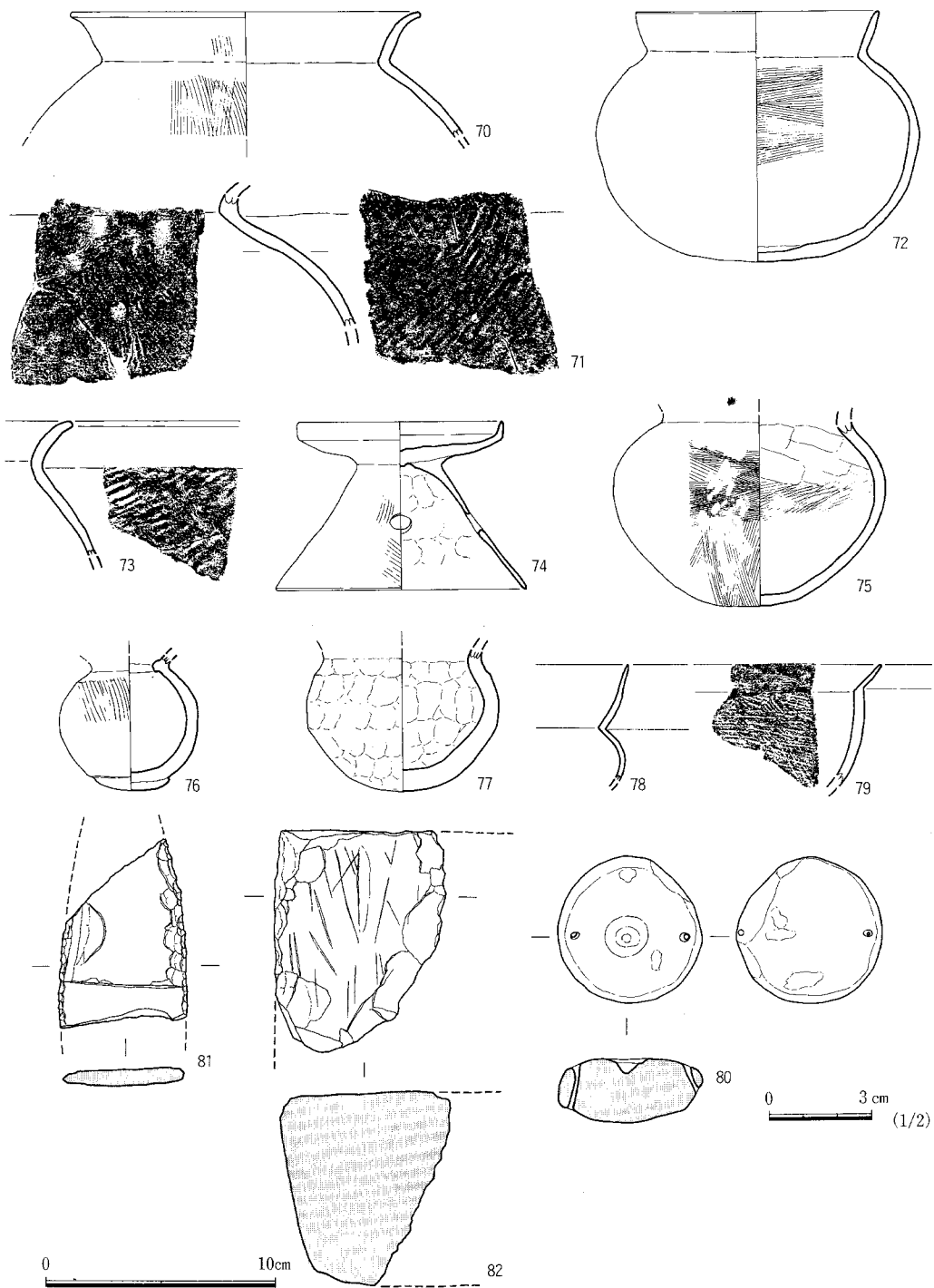


Fig.15 溝SD06出土遺物実測図③ (縮尺1/2・1/3)

に立ち上がり、強く外反する。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整で、部分的にハケ調整の痕跡がみられる。体部外面はタテハケ調整である。色調は外面が黒色、内面が淡い茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。71は現存長5.8cmを測る。外面は体部が平行タタキで、頸部はタテハケ調整、内面は体部がタテハケ調整で、頸部はナデ調整である。外面は明茶褐色、内面は黒色を呈する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。72は口径10.8cm、器高11.1cm、最大径14.3cmを測る。口縁部はやや内弯気味に立ち上がり、頸部内面には稜を持つ。全体的に薄手のつくりで、体部はやや扁平な球体を形成する。内外面ともに丁寧なナデ調整で、内面には部分的にハケ調整を施す。外面は淡い茶色、内面は明褐色を呈す。胎土に少し砂粒を含む。焼成は良好である。73は現存高5.7cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は丸味をおびる。体部外面は平行タタキ、内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。茶色を呈し、一部に黒斑がある。68~73は3世紀末~4世紀前半頃と思われる。

器台 (74) 小型の器台で、口径9.1cm、底径11.1cm、器高7.5cmを測る。坏部の口縁部は真直ぐに立ち上がる。脚部は内弯気味に大きく開く。脚部には径9mmの穴が四ヶ所ある。外面にハケ調整がみられる。器厚は薄く、胎土の砂粒は少ない。淡褐色を呈す。焼成はあまい。

小型丸底壺 (75・77・78・79) 75は口縁部を欠く。現存高8.1cm、最大径12cmを測り、最大径は上位にある。底部はやや平底気味である。外面は上位がヨコハケ、下位がタテハケ調整で、内面はへラケズリである。淡褐色を呈す。胎土に砂粒はほとんど含まない。焼成はややあまい。78は現存高5.2cmを測る。口縁部は高く、内弯気味に開く。外面はへラ磨き調整である。色調は淡褐色。77は口縁部を欠く。底部は尖り気味で、肩が張る。現存高6.3cm。外面は粗いナデ調整、内面は口縁部のみナデ調整である。内外面ともに指圧痕が残る。褐色を呈す。焼成はやや軟。79は現存高5.4cmを測る。口縁部は短く、内弯気味に開く。外面はへラ磨き調整、内面はハケ調整である。78が淡赤褐色である。78・79の胎土は精良で、焼成は良好である。4世紀前半。

小型壺 (76) ミニチュア土器である。口縁部の大部分を欠く。頸部径3.2cm、器高6.1cmを測る。口縁部は短く立ち上がる。底部には4mm程の厚さで、径3cmの大きさに粘土を貼り付ける。外面は部分的にタテハケ調整がみられるが、大部分は丁寧なナデ調整である。胎土には砂粒を含まない。淡茶褐色で、大部分を黒斑が占める。焼成は良好。

土製品 (80) ほぼ円形で、径約4.2cm、厚さ1.9cmを測る。側辺の相対する位置に1.5~2mmの小孔が2つ貫通している。孔は一方から穿孔される。片面にのみ土製品中央部に径6mm、深さ3mmの窪みを有するが、貫通していない。黒灰色~茶褐色を呈し、胎土には細かい砂粒を含む。焼成は良好。

石製品・石剣 (81) 未成品である。現存長8.4cm、最大幅5.6cm、最大厚7.5cmを測る。先端と基部を欠いている。扁平な石材を用い、両側面から調整剥離を行い、整形している。研磨は施していない。玄武岩製である。

砥石(82) 現存長9.8cm、現存幅7.6cm、最大厚8.7cmを測る。断面形が方形を呈し、一部欠損する。上面を砥面として利用する。側面にも一部研磨の痕跡がある。側面はきれいに面取りをする。硬質砂岩製。

SD07 (Fig.3 PL.1・3)

旧河川状を呈している。長さ約37m、最大幅10m、最小幅約3m、深さ約50cmを測る。溝はコの字形を呈しているが、南側の調査区境界地に位置するため全体形は不明である。溝の形は一周溝のようにも見え、方形周溝墓の可能性もある。溝の内側からは浅いピットが4個の他、黄灰色の粘質土が中央部に分布していた。溝の堆積土は単純で、粘質の強い真黒色土である。溝を掘り込んでいる層はシルト層で、溝の底部は砂質土に達しているため湧水が著しい。

遺物は土師器片が少し出土したのみである。古墳時代前期と思われる。

SD08 (Fig.3 PL.1)

現存長1.5m、幅20cmを測り、東西方向の小溝である。遺物の出土はない。

SD09 (Fig.3 PL.1)

現存長2.9m、幅1.4m、深さ10cm前後を測る溝で、東西方向に伸びる。西端をSD03に切られる。土師器高坏、須恵器の大甕などが出土した。古墳時代後期。

SD10 (Fig.11 PL.4)

主軸をほぼ南北にとる溝で、北端及び南端は調査区域外のため全長は不明である。溝SD03・SD11・土壙SK35を切る。現存長18m、幅1.3mを測る。深さは北側で約40cm、南側は約10cmを測り、北側に向かって深くなる。断面形は逆梯形状である。底部は水平で、幅は40~50cmを測る。覆土の上部は黒色粘質土で、下部は暗い茶褐色粘質土であり、わずかにシルトが混入する。遺物は多く、弥生式土器甕、土師器甕・二重口縁壺・長頸壺・高坏・坏・鉢・椀・甑、須恵器甕・坏・坏蓋・甑・壺、平瓦・丸瓦、砥石などが出土した。10世紀代である。

遺物 (Fig.16・17 PL.8)

土師器・壺(83) 二重口縁壺の口縁部である。口径19.2cm、現存高3.1cmを測る。口縁部は強い段をもち、外方に開く。内外面ともナデ調整である。茶褐色を呈する。胎土に砂粒は含まない。焼成は良好。搬入土器である。3世紀後半。

甕(95) くの字形の口縁部片で、現存高7.4cmを測る。内面はへら削り、外面はタテハケ調整である。口縁部は内外面ともナデ調整である。外面の頸部に指圧痕が残る。淡褐色を呈す。胎土に砂粒を多く含む。焼成はややあまい。

甑(96~99) 4点とも把手である。96は長さ6cm、幅5.3cm、厚さ2.7cmを測る。断面形は扁平楕円形を呈する。明褐色を呈す。97は長さ5.3cm、幅3.5cm、厚さ2.5cmを測る。先端部は強く跳ね上がる。赤褐色を呈す。98は長さ5.2cm、径3.5cmを測る。断面形が不整楕円形で、先端部は尖る。淡茶褐色を呈する。99は断面形が不整円形で、長さ5.8cm、径4.5cmを測る。淡い茶色

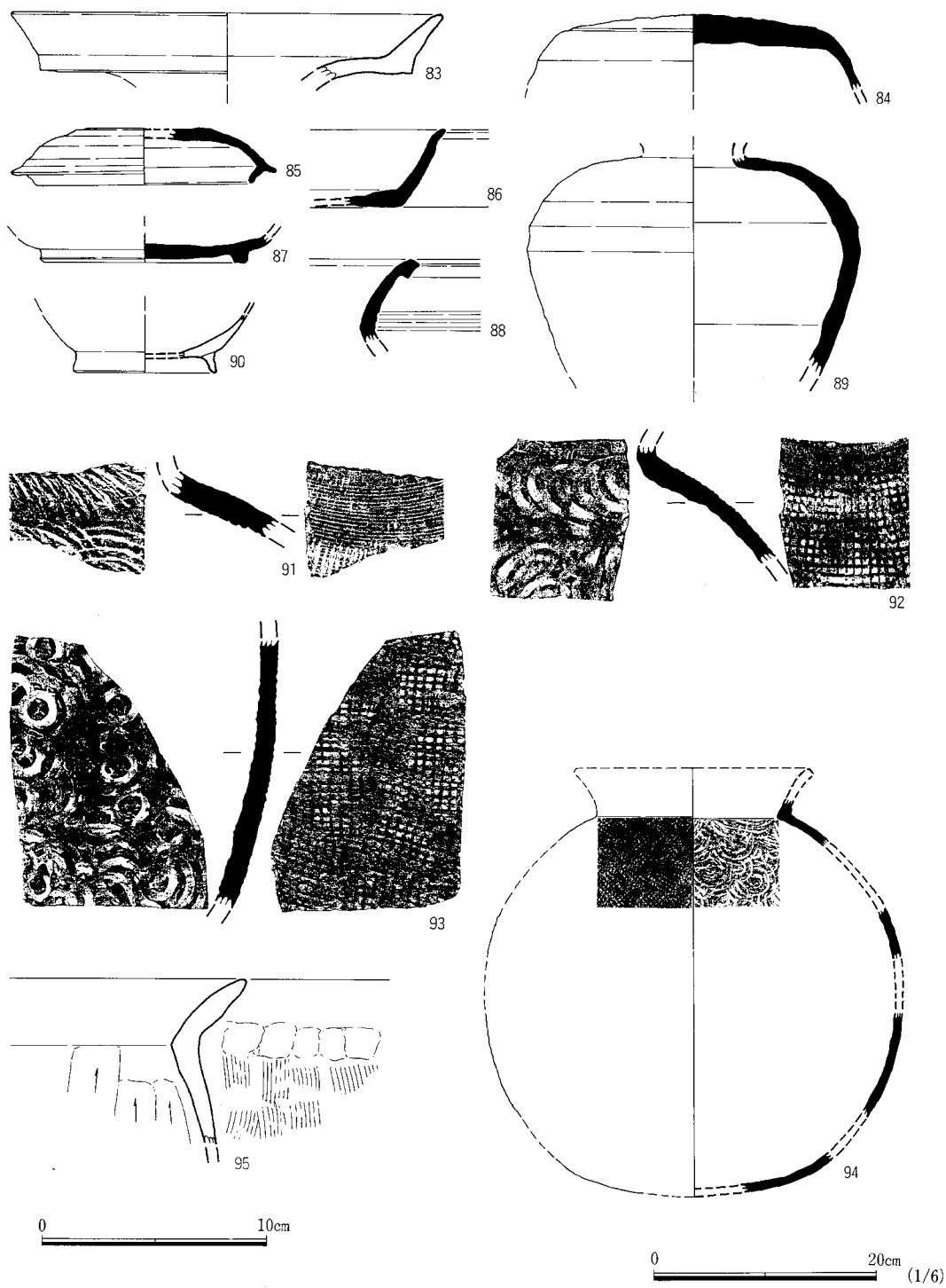


Fig.16 溝SD10出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/6)

を呈する。黒斑がみられる。調整は4点ともナデ調整で、97・98は丁寧なナデである。97は胎土に木目の細かい砂粒を多く含む。焼成は4点とも良好である。

椀(90) 高台径6cm、器高2.6cmを測る。高台は高く、外傾する。先端は丸く仕上げる。内外面ともナデ調整で、淡褐色を呈する。胎土には砂粒をわずかに含む。焼成はややあまい。10世紀。

須恵器・坏蓋(84・85) 口縁端部を欠く。現存高3.5cmを測る。天井部はヘラケズリである。天井部と口縁部との境は丸みを帯びる。内面は不整方向のナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。灰白色を呈する。胎土に砂粒を含む。焼成は不良。生焼けである。85は口径9.6cm、器高2.6cmを測る。底部と体部の境に稜をもち、体部は丸みをもつ。口縁部内面のかえしは内傾し、端部は外反する。内面は底部がナデ調整、体部はヨコナデ調整である。外面は磨滅している。青灰色を呈する。焼成良好。6世紀後半。

坏身(86・87) 86は器高3.4cmを測る。体部は内穹気味に立ち上がり、口縁端部は短く外反する。底部は内外面ともナデ調整、体部は内外面ともヨコナデ調整である。胎土には木目の細かい砂を含む。青灰色を呈す。焼成はややあまい。87は高台径9cm、現存高1.3cmを測る。高台は低く、底部の端より少し内側につく。断面形は台形状を呈す。内底部はナデ調整、外面はヨコナデ調整である。二次火を受け茶色を呈する。胎土には砂粒を少し含む。焼成は良好。

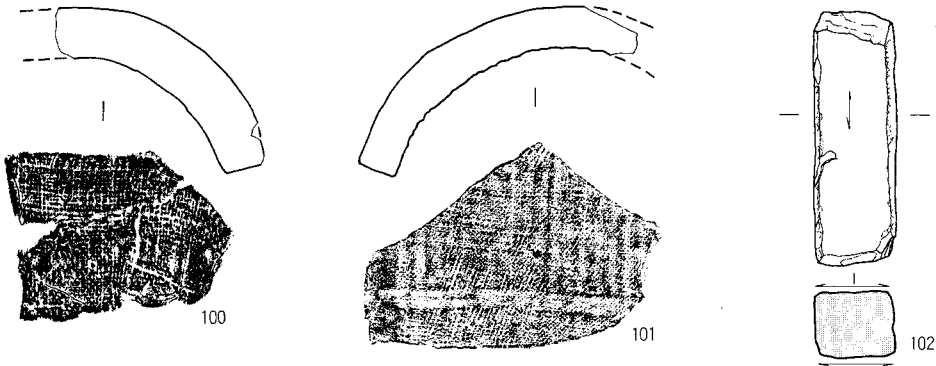
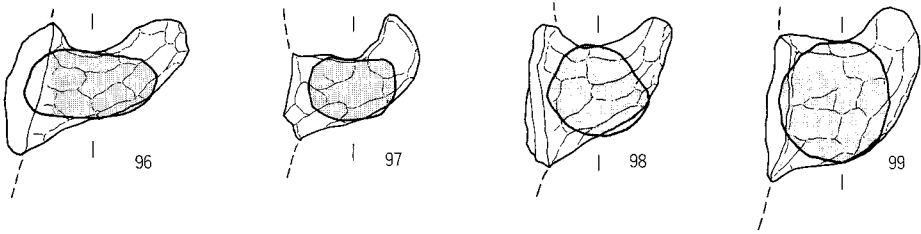
壺(88・89) 88は口縁部片である。現存高4cmを測る。口縁部外面に三角突帯を有する。内外面ともナデ調整である。茶色、又は暗い灰褐色を呈す。胎土には砂粒を少し含む。焼成は良好。89は口縁部と底部を欠く。肩が強く張り、長頸壺と考えられる。現存長10cmを測る。外面上位はヨコナデ調整で、部分的に不整方向のナデ調整が施される。暗灰色を呈す。胎土には砂粒を少し含む。焼成は良好である。8世紀前半と思われる。

甕(91～94) 91・92は肩部、93は胴部片である。92の外面は格子目タタキ、内面は青海波の当て具痕である。91の外面は格子目タタキで、その後には頸部にカキ目を施す。内面は青海波タタキ痕である。93の外面は格子目タタキ、内面は同心円の当て具痕である。91は灰緑色、92は茶灰色、93は青灰色を呈す。94は大甕である。復原高94cm、復原最大径100cm、頸部内径40.8cmを測る。外面は格子目タタキ、内面は同心円の当て具痕である。黄灰色を呈し、生焼けである。

瓦類・丸瓦(100・101) 100は丸瓦片である。高さ6.7cm、弧深4.7cm、厚さ2.8cmを測る。内面は粗い布目痕が残る。灰白色を呈す。焼成はあまい。101は須恵質の瓦である。高さ6.9cm、弧深5.2cm、厚さ1.7cmを測る。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は細かい布目痕が残る。青灰色を呈す。胎土に砂粒を少し含む。焼成は良好。

石製品・砥石(102) 方柱状を呈し、現存長10.2cm、幅3.3cm、厚さ2.7cmを測る。小口と4面を面取りしており、A面、及びB面を砥面として利用する。粒子の粗い砂岩製である。

SD10



SD11

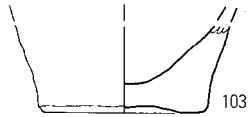


Fig.17 溝SD10・11出土遺物実測図（縮尺1/3）

SD11 (Fig. 3 PL. 1)

SD09とほぼ並行する東西方向の溝で、溝SD03、及びSD10に切られる。現存長4.4m、幅1m、深さ20cmを測る。遺物の量は少なく、弥生式土器片、土師器片、須恵器坏蓋などが出土した。古墳時代後期。

遺物 (Fig.17)

弥生式土器・甕 (103) 底部径6cm、現存高3.5cmを測る。底部は上げ底である。内外面ともにナデ調整である。胎土に砂粒を多く含む。淡褐色を呈する。焼成は良好。弥生時代中期。

(4) ピット (SP) 及び土遺物

SP02～SP32 (Fig.18)

調査区の北東側が削平を受けていたこと又、南西側は遺構検出のため整地層を除去し、地山面で遺構確認作業を行ったためピットの遺存状態は悪い。南西側では掘立柱建物の柱穴と考えられる直径30～80cm大のピットが分布している他、溝SD06の北側には柵状の柱列が認められ

る。北東側は井戸SE01を中心にして径15~30cmを測るピットが不規則に分布している。

遺物 (Fig.18)

土師器・高坏 (104) 高坏の坏部である。外面の底部と口縁部の境に段をもち、口縁部はゆるやかに外反する。調整は外面がタテハケ調整の後ナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ調整、内面はヨコハケ調整の後ナデである。明茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に細かい砂粒を少し含む。3世紀後半。SP2からの出土。105・106は土師器高坏の脚部で、同一固体の可能性がある。口縁端部は平坦に仕上げる。ともに外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整を施す。105は外面が淡茶褐色で、一部黒斑がある。内面は茶色である。106は外面が暗褐色、内面が茶褐色を呈す。焼成はともに堅緻で、胎土にわずかに砂粒を含む。SP3からの出土。

須恵器・坏 (107) 坏身片である。口径は約12.5cmで、体部は扁平気味である。立ちあがりは先端を欠くが、比較的短く、内傾すると思われる。受部は屈曲して外方へ張り出す。体部外面の2/3が右回りの回転へう削りで、口縁部と内面はヨコナデ調整で、底部はナデである。青灰色を呈す。焼成は良好。胎土に大粒の砂が少し含まれる。6世紀中頃。SP17から出土。

甕 (108) 体部片である。内面は青海波のタタキ、外面は格子目のタタキの後、部分的にナデ仕上げである。色調は内面が淡い紫色、外面が青緑色である。SP5から出土。110~112は須恵器甕の破片。調整は110の内面が青海波のタタキ、外面は格子目タタキの後部分的にカキ目を施す。111の内面は同心円のタタキ、外面は格子目タタキの後ヨコナデ調整。112の内面は同心円のタタキ、外面は格子目タタキである。色調は110の内面が灰色、外面が淡青灰色、111の内面が灰色、外面が淡い茶色、112は青灰色である。113は須恵器の生焼けで、内面は青海波のタタキ、外面は格子目タタキを施す。茶色を呈す。焼成はあまい。いずれもSP28から出土した。

鞆羽口 (109) 羽口片である。現存長8cmを測る。推定直径は6cm位である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は不良。SP22からの出土。

土師器・鉢 (114) 鉢形土器の口縁部と思われる。灰白色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は不良である。内外面ともナデ調整である。

甗 (115) 甗の把手である。断面形は不整楕円形を呈し、茶色である。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好である。SP28から出土。

瓦類・丸瓦 (116) 厚さ2cmを測る。谷部には布目痕が残る。淡青灰色を呈す。焼成は良好である。SP28から出土。

石製品・磨製石斧 (117) 未成品である。現存長6.4cm、幅5cm、厚さ1.2cmを測る。基部を欠く。両側辺、及び刃部に剥離整形痕が残る。片面は研磨されていることから、磨製石斧の破損品を再加工しているものであろう。安山岩製。SP32からの出土である。

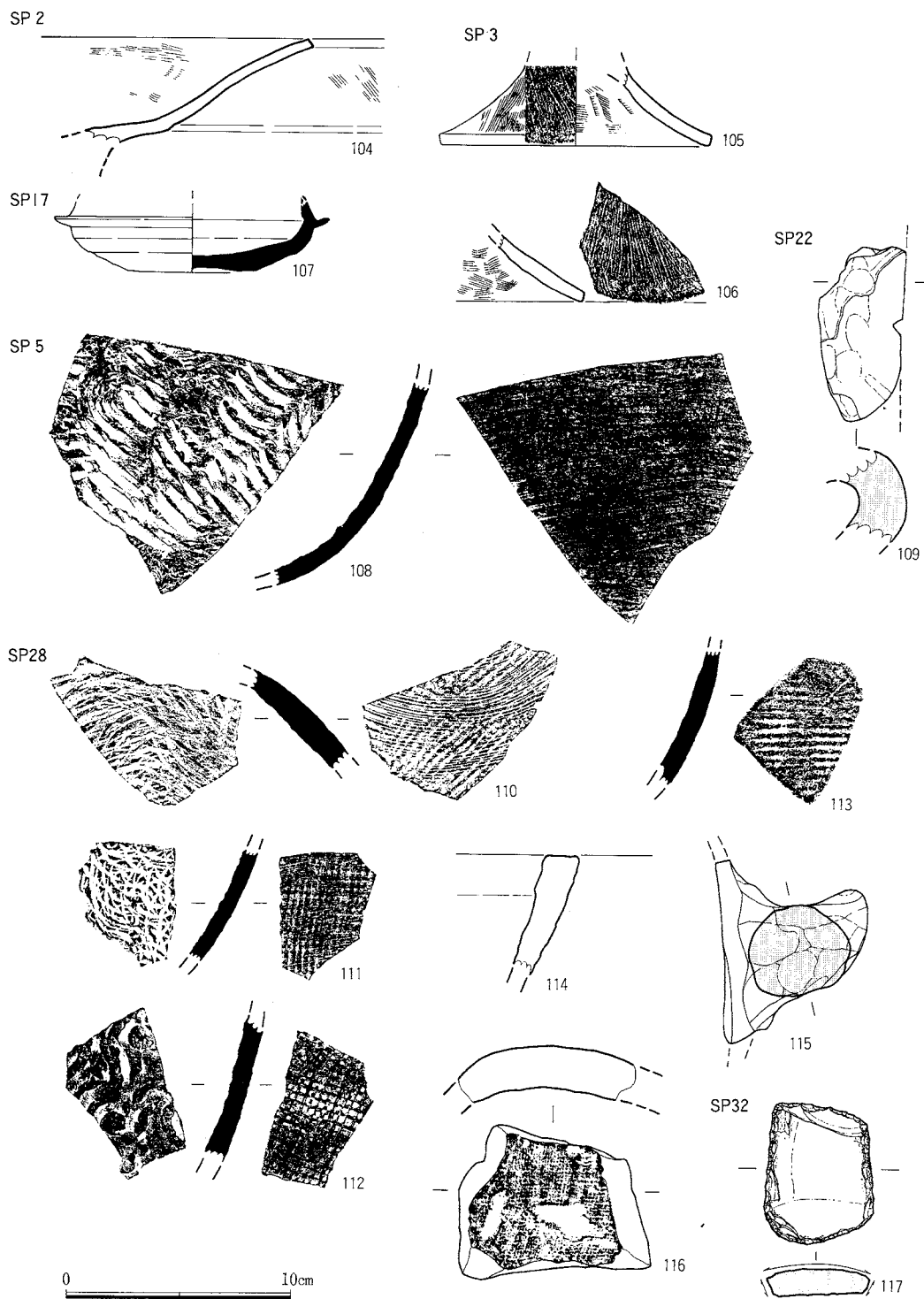


Fig.18 ピット (SP) 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

(5) 整地層及び出土遺物 (Fig.19~28 PL. 8~10)

第3章の2.の土層の項で述べたように、調査区の南西側には第III層の黒褐色粘質土が堆積しており、深さは約50~120cmを測る。特に溝SD06の位置する地域は、旧地形においては浅い谷の谷頭付近に相当しているため、黒褐色粘質土は約120cmの厚さがある。黒褐色粘質土内には縄文時代から鎌倉時代までの遺物を含み、特に奈良・平安時代の土師器、須恵器が多量に出土した。これらの土器の出土状態から第III層は整地層を形成しているものと考えられる。但し、上面において遺構の検出を試みたが、明確に遺構を色別することができず、止むなく地山の第IV層黄褐色シルト質層の上面まで掘削した。鎌倉時代の遺物には中国の白磁、青磁片が数点出土しているが、これらは整地層内に掘り込まれた遺構（柱穴）に含まれていたものと推定できる。

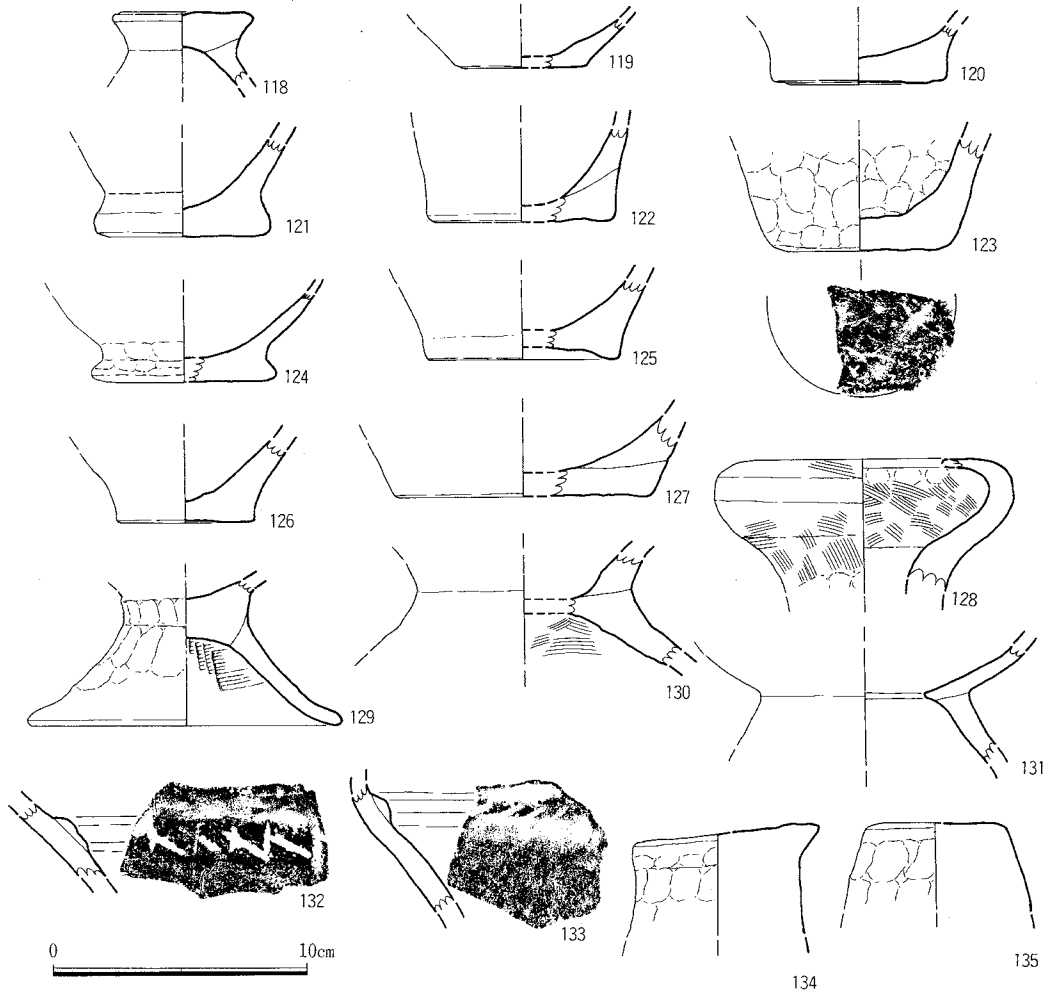


Fig.19 整地層出土遺物実測図① (縮尺1/3)

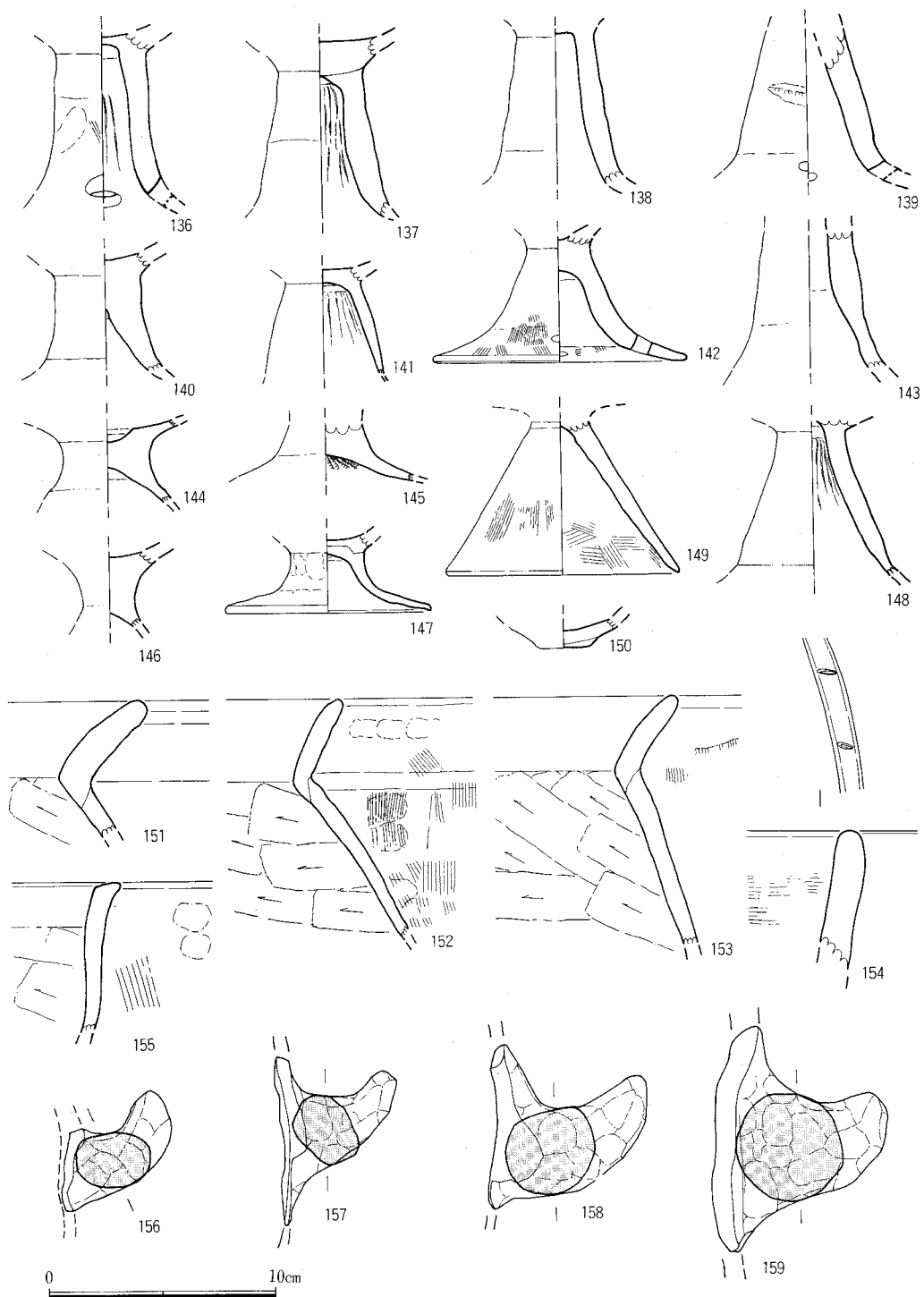


Fig.20 整地層出土遺物実測図② (縮尺1/3)

第Ⅲ層の黒褐色粘質土が形成された時期は須恵器の壺形土器などにより、8世紀後半から9世紀前半と考えられる。

縄文式土器・蓋(118) つまみの部分で、端部が強く張り出している。上部径5.7cm、現存高2.9cmを測る。上面は横方向のナデ調整を施す。

甕(121・124) いずれも平底で、端部が強く張り出し、円盤貼付状を呈す。底部径は124が5.6cm、121は5.9cmを測る。

弥生式土器・壺(119・123・127・132・133) 119・123・127は底部片で、119は弥生時代終末期、123・127は弥生時代後期と思われる。132・133は胴部片である。頸部に突帯を貼り付け、刻目を入れる。弥生時代後期。

甕(120・122・125・126) 120・122は平底、125・126は上げ底気味である。いずれも内外面は磨滅している。弥生時代中期と思われる。

台付土器(129・130・131) 脚部は外開きで、脚端部は丸みをもっている。底径12.2cm、現存高5.8cmを測る。外面には指圧痕がみられる。筒部は外面がナデ調整、内面はヨコハケ調整である。淡茶褐色を呈す。130は接合部分の破片である。内面にハケ調整を施す。131は黄土色を呈す。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。胎土は良質である。弥生時代後期。

器台(128) 128は現存高5cmを測る。口縁部が強く内側へ巻き込む。器厚が厚く、頸部では1.7cmを測る。外面にはハケ調整とナデ調整、内面はハケ調整を施す。内外面に赤色顔料の痕跡がみられる。赤褐色を呈す。

支脚(134・135) 134は沓形支脚で、上端部の一端を強くつまみ出して沓形を形成する。135の外面は丁寧なナデ調整である。

土師器・高坏(136~149) 136・140・143の筒部は直線的に伸び、裾部は外反する。136は裾部との屈曲部に径1cmを測る穿孔を3ヶ所に設ける。137~139は筒部の中程が膨らみ、裾部は外反する。139は屈曲部に径1cm程の穿孔がある。141は薄手の作りである。142は底径11cm、現存高5.7cmを測る。筒部は緩やかに開き、裾部はラッパ状に広がる。屈曲部に径8mmの穿孔がある。145の脚部は大きく開く。内面の中心部に径6mmの窪みがみられる。146は小型の高坏である。147は底径9.2cm、現存高3.6cmを測る。裾部は大きく直線状に開き、先端部は短く屈曲する。断面形は三角形を呈す。148は底径6.8cm、現存高7.0cmを測る。筒部の中程がやや膨らみ、裾部先端は短く内側に屈曲する。外面調整は136・142がハケ調整、他はナデ調整である。内面は145がハケ調整で、他はナデ調整である。136・139・144・146は胎土に砂粒を含む。142・145の胎土は精良である。焼成は136・137・139・146・147が軟質で、他は良好である。145は堅緻である。136は淡赤褐色、137・139・140・144は淡い黄土色、138・143・145は淡褐色、141は淡赤褐色、142・146・148は茶褐色、147は明茶褐色を呈する。149は脚部で、底径10.5cm、現存高7.3cmを測る。外面はハケ調整の後にナデ調整を施す。内面にはハケ調整を施す。外面は明褐

色、内面は黒色を呈する。

壺 (150) 底部片である。小さな底部をもち、底径1.6cmを測る。淡い黄土色を呈す。

甕 (151~153・155) 151~153は器厚が厚く、くの字形に外反する口縁部である。3点とも内面はヨコ方向のヘラ削りで、152と153は外面にタテハケ調整を施す。152の外面には指圧痕が残る。151は淡い茶色、152は外面が黒色、内面が淡い茶色、153は外面が淡茶褐色、内面が淡褐色を呈する。155は現存高6.7cmを測る。口縁部はわずかに外反する。内面はヘラ削り、外面はハケ調整を施す。胎土に細かい砂粒を多く含む。

鉢 (154) 現存高6.3cmを測る。口縁端部は丸みをもち、ヘラによる刻目を施す。内面はヨコハケ調整を施す。焼成はあまく、茶褐色を呈す。

甗 (156~159・250・251・263) 156~159は把手である。156は先端が尖る。157は細長い作りで、先端は尖る。159は断面形が扁平楕円形である。156~158は貼り付けである。156は赤褐色、157は茶褐色~黒灰色、158は淡い茶色、159は淡い黄土色を呈する。250・251・263は底部片である。250は現存高4.6cmを測り、底を抜いている。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のヘラ削りである。淡茶褐色を呈す。焼成はあまい。6世紀前半。251・263は甗の底板で、十字形に作られていたものと考えられる。現存長5cmを測る。明赤褐色を呈す。焼成は良好である。263は現存長5.8cmを測る。

皿 (213) 底径6.6cm、器高9.5mmを測る。糸切り底である。体部はわずかに外反する。体部から内底部までヨコナデ調整である。茶褐色を呈する。

坏 (214) 口径16.2cm、高台径12.0cm、器高4.1cmを測る。高台は高く、断面形が細い三角形を呈し、外傾する。茶色を呈する。焼成はやや不良である。内外面は磨滅している。

移動式竈 (252・253) 鏝の部分に相当する。252は高さ5.3cm、253は高さ8.6cmを測る。いずれも外面はナデ調整である。淡茶褐色を呈する。

須恵器・坏蓋 (160~183) 160~162は口径11.8~13.8cm、器高3.6~4.4cmを測る。160と161は天井部の1/2が右回りの回転ヘラ削り、162は2/3が左回りのヘラ削りである。口縁端部は丸く仕上げる。162は器壁が厚く、最大厚1.2cmを測る。天井部は丸みをもち、体部との境は明瞭ではない。164~173は口径8~11.5cm、器高1.7~3.0cmを測る。164・165~168は口縁部の内側にかえりをもつ。165のかえりは長い。168の口縁端部は薄く、尖っている。164・166・172・173は天井部にX印の、163は体部外面にM印のヘラ記号がみられる。174~179は口径12.5~15.0cm、器高1.3~2.9cmを測る。177は完形品である。174・176・177・180は擬宝珠形の扁平なつまみをもつ。177のつまみ頂部は尖る。174~176・180の口縁端部は内側へ折り返す。175は体部に丸みをもつ。177は天井部と体部の境が明瞭である。175・176・179は天井部外面に右回りの回転ヘラ削りを施す。179・181・183は口径17.8~25.2cm、器高2.1~2.2cmを測る。179は擬宝珠形のつまみを有する。181・182の口縁端部は平坦に形成する。183の口縁端部は屈曲し、短く外

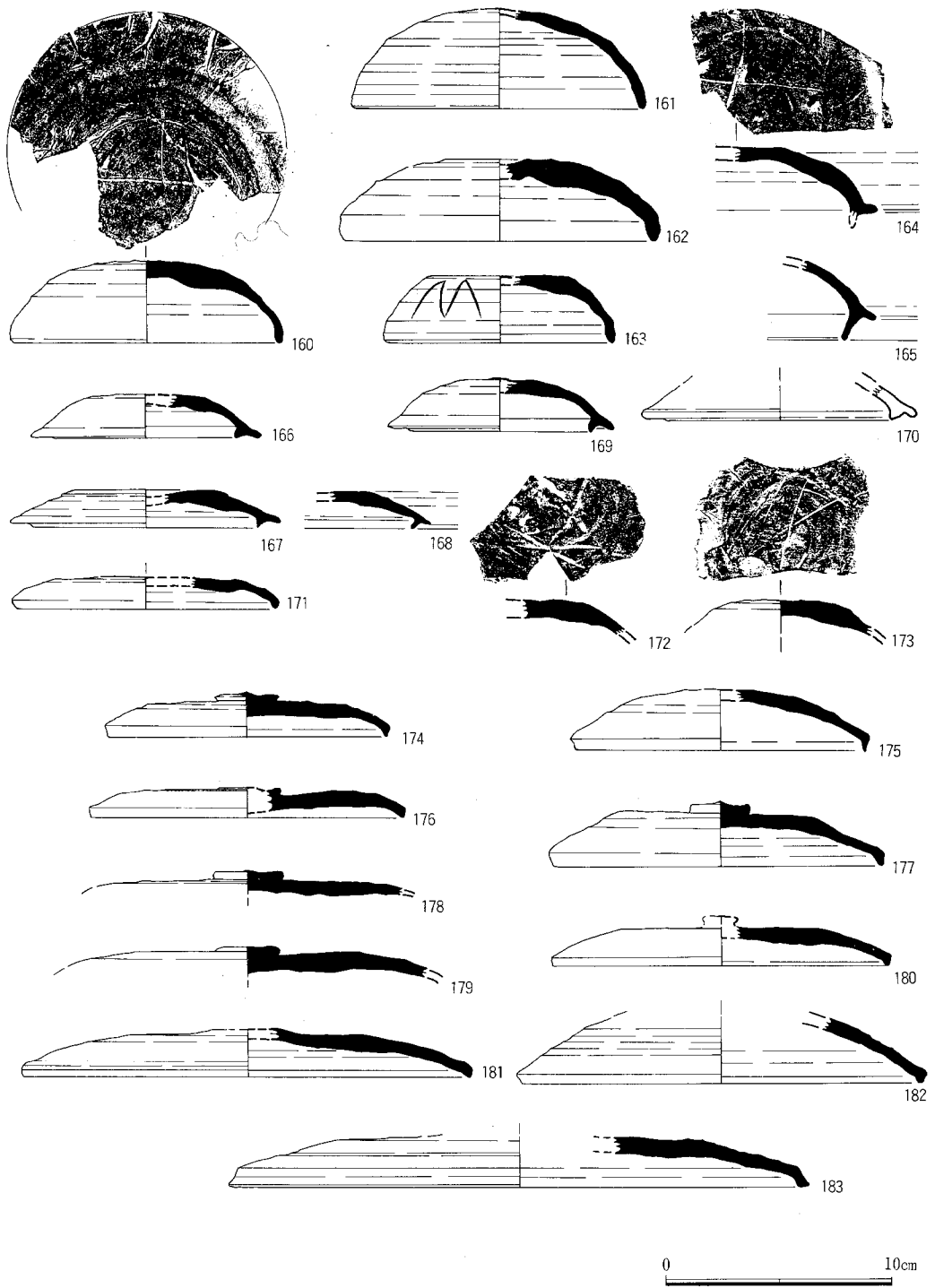


Fig.21 整地層出土遺物実測図③ (縮尺1/3)

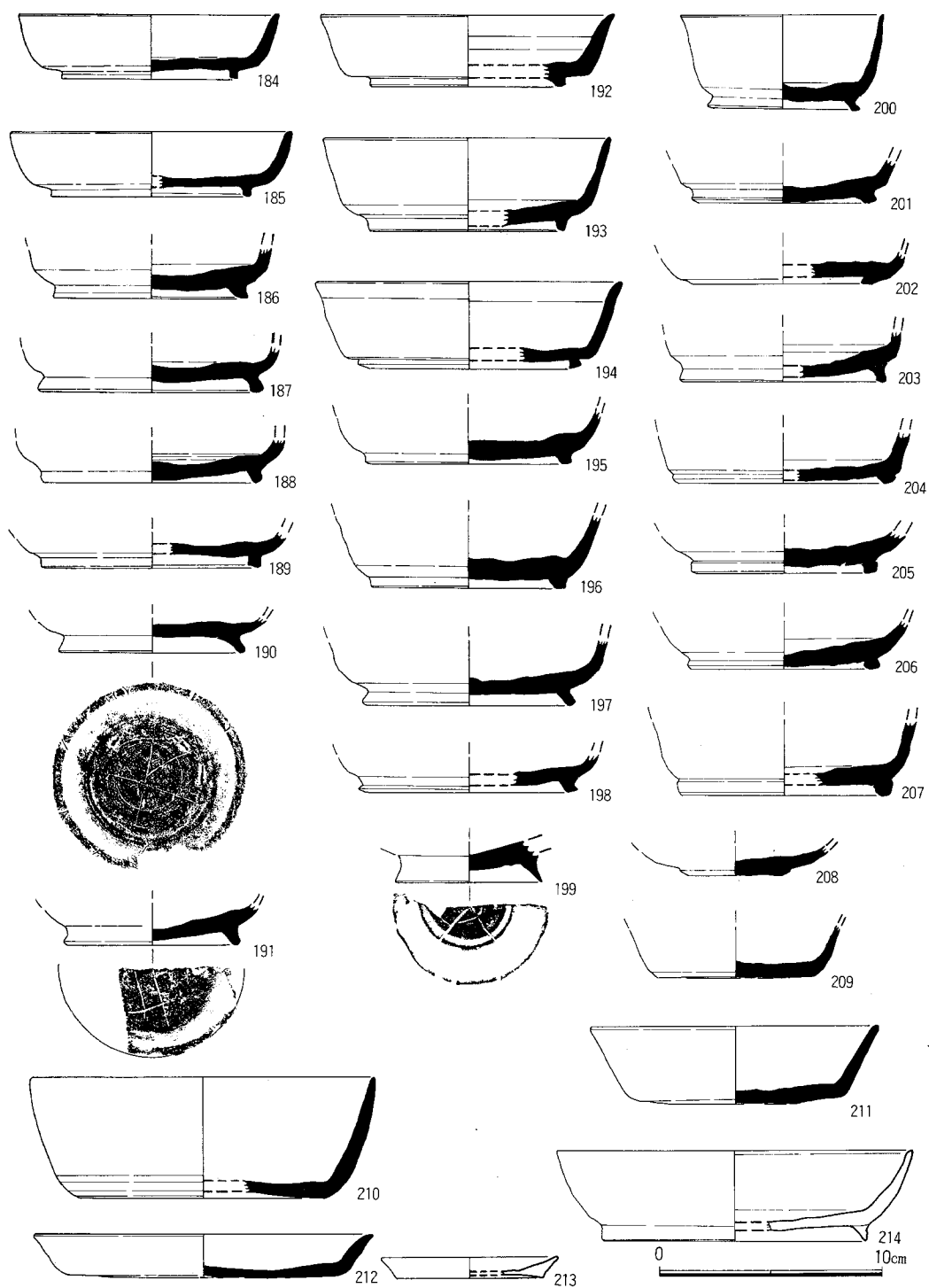


Fig.22 整地層出土遺物実測図④ (縮尺1/3)

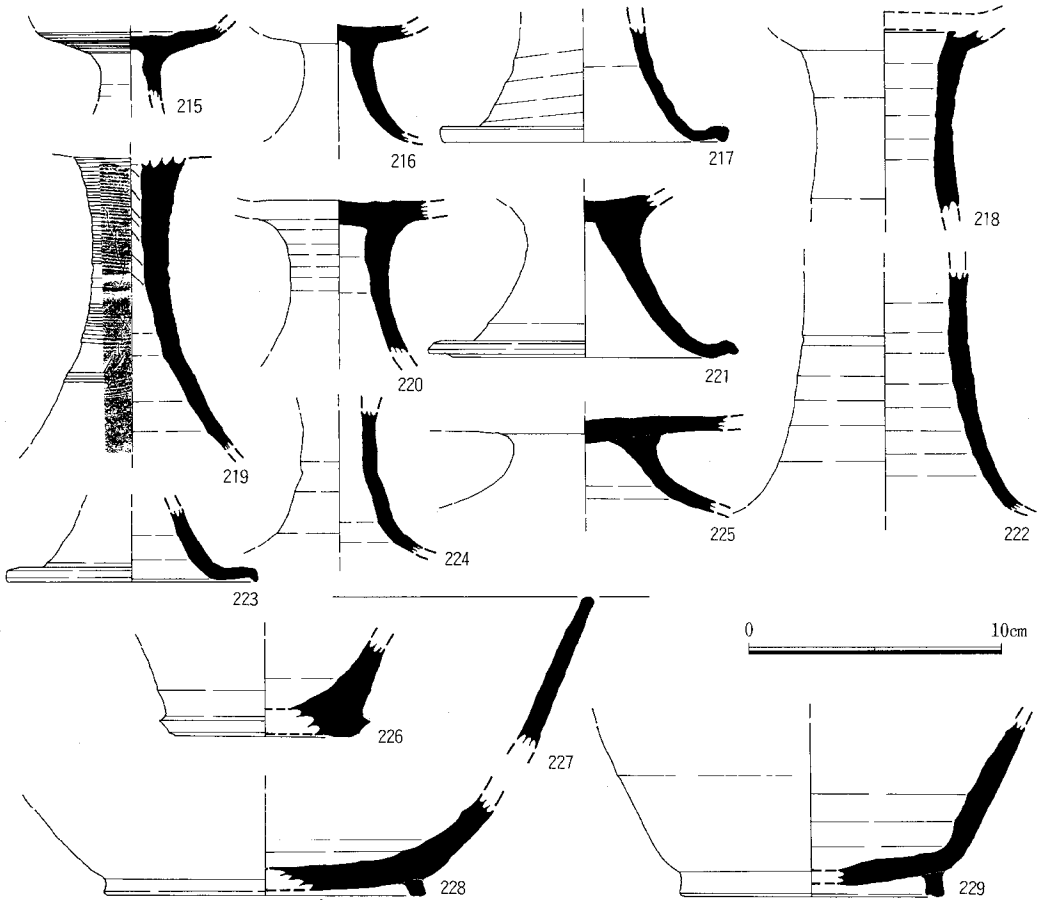


Fig.23 整地層出土遺物実測図⑤ (縮尺1/3)

反する。175・176・179～183の天井部は右回りの回転ヘラ削りである。177は生焼け、170は赤焼け土器である。160～162・164は6世紀後半頃、163・165～173は7世紀頃、174～183は8世紀前半～中頃と思われる。

坏身 (184～210) 184～207は高台をもつ。208～210は高台をもたない。184・192・194・202は底部と体部の境が明瞭であるが、他は丸みを帯びる。200は体部の立ち上がりが強く、器高が高い。ほぼ完形で、口径9.2cm、高台径6.3cm、器高4.3cmを測る。体部は内外面ともヨコナデ調整、内底部は不整方向のナデ調整である。底部はヘラ起こしである。210は大型の坏で、口径15.5cm、底径11.0cm、器高5.5cmを測る。体部と底部の境はヘラ削りで、丸く仕上げる。190・191・199は底部にヘラ記号をもつ。188・190・197・211は生焼けである。全て8世紀の所産と考えられる。

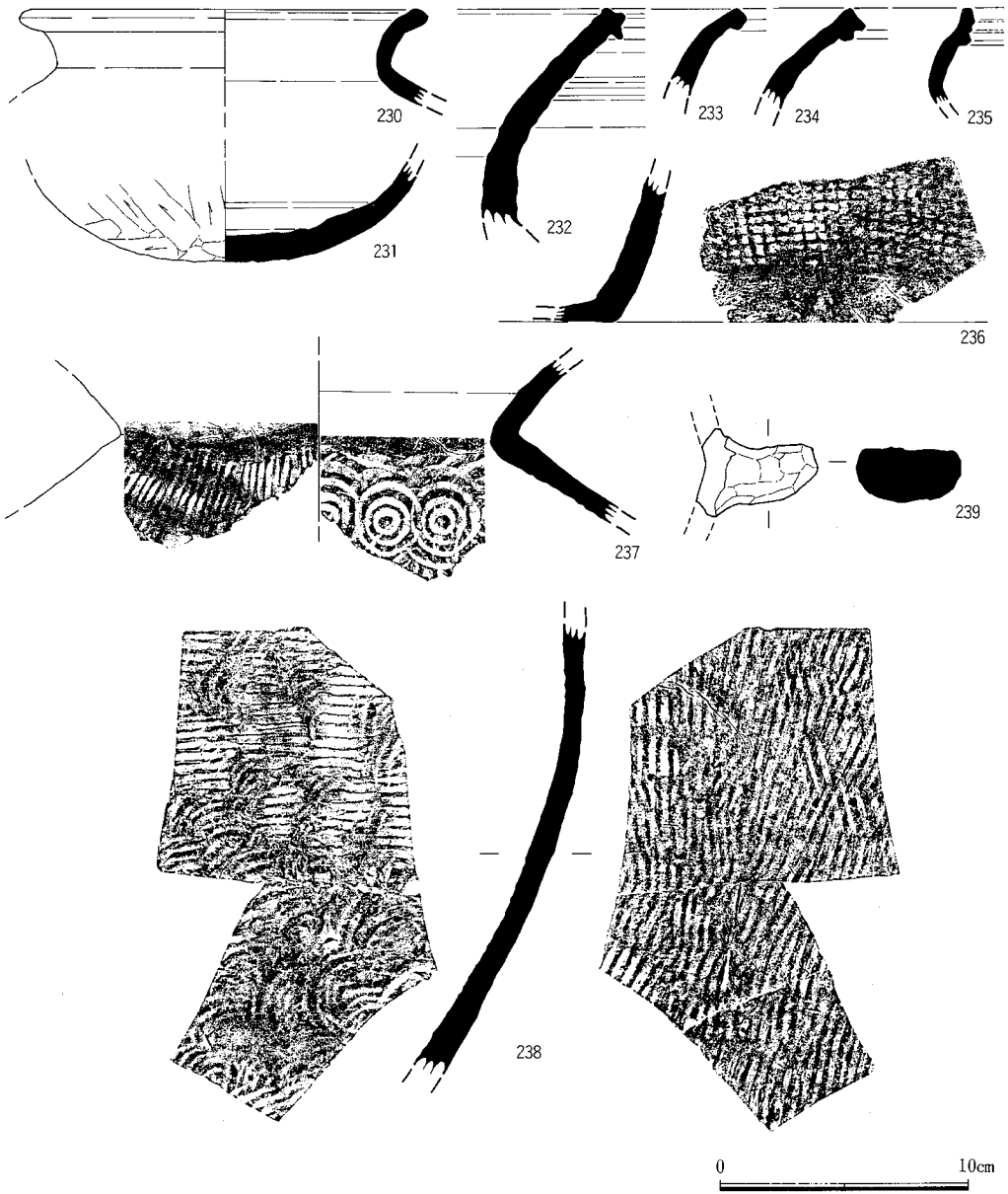


Fig.24 整地層出土遺物実測図⑥ (縮尺1/3)

皿 (212) 体部は外反する。内外面はヨコナデ調整で、口径15.2cm、底径12.0cm、器高2.0cmを測る。生焼けである。8世紀後半～9世紀前半。

椀 (208) 小さな底部をもち、底径4.4cmを測る。底部は厚く仕上げる。東播系の須恵器であろうか。

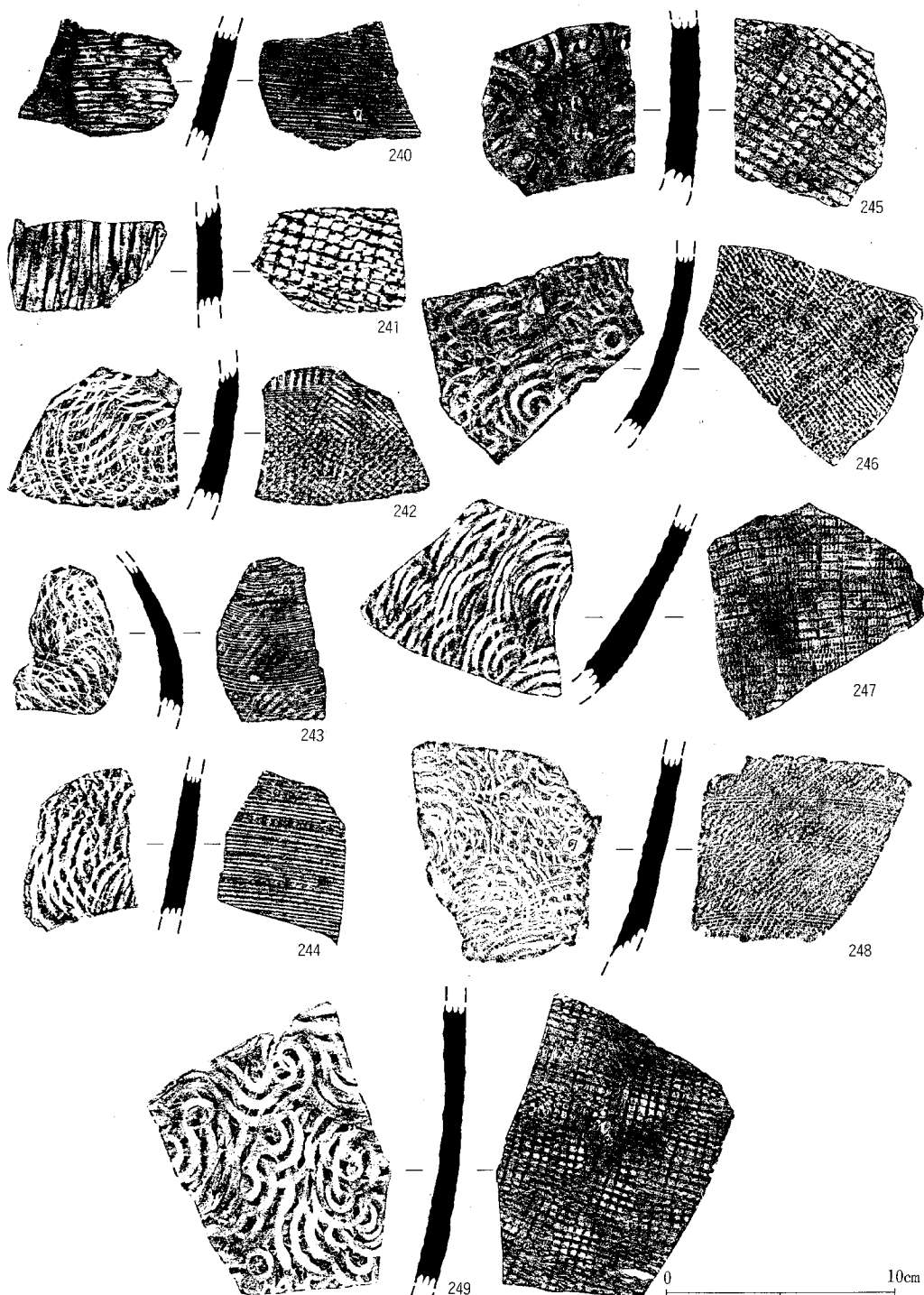


Fig.25 整地層出土遺物実測図⑦ (縮尺1/3)

高坏 (215~225) 217・221・223は脚部、その他は筒部の破片である。222は長頸壺の頸部の可能性がある。217・221・223は大きく開く裾部で、217・221の端部は下方につまみ出している。225の脚部は低く、大きく外に開く。215は坏部の外面にカキ目を、219は筒部外面にカキ目を施す。222は筒部中位に沈線を施す。調整は全て内外面ともにヨコナデ調整である。221・225は生焼けである。215~217・219~221・223・224は6~7世紀、218・222・225は8世紀と思われる。

鉢 (226) 底部端をつまみ出している。底径7.0cm、現存高3.9cmを測る。底部はへら削り、体部は内外面ともヨコナデ調整である。9世紀頃。

壺 (227~229・232・235・236) 227は直口壺の口縁部、228・229・236は底部、232は広口壺の口縁部片である。235は小型壺の口縁部である。232は器壺の脚部の可能性がある。228は高台径12.7cm、229は高台径10.2cmを測る。高台は底部の端につく。228は体部の立ち上がりが丸みをもち、緩やかに外反する。内外面ともにヨコナデ調整、228の内底部は不整方向のナデ調整である。232は外面に3条の沈線を施す。236の外面には格子目タタキが施される。236は生焼けである。232・235は6世紀後半、その他は8世紀後半~9世紀前半と思われる。

甕 (230・231・233・234・237・238・240~249) 230・233・234は口縁部、231は底部、237は頸部、238は体部片である。230は口径15.6cmを測る。口縁端部は丸く仕上げる。231の外面は粗いへら削りで、未調整である。底部にへら記号がみられる。237は体部内面に同心円タタキ、外面に平行タタキを施す。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。238は内面に青海波タタキと平行タタキ、外面が平行タタキである。

甌 (239) 把手の部分である。断面形は扁平な楕円形状を呈し、長さ4.6cm、幅4.2cm、厚さ2.1cmを測る。部分的にナデ調整である。粗い作りである。

白磁・皿 (254) 底径4.0cm、現存高1.6cmを測る。灰色を帯びた透明釉がかかる。底部は露胎である。内底面に草花文のへら彫りを施す。外面には貫入がみられる。胎土は淡い茶色を呈す。

椀 (256~258) 256は高台径6.4cmを測る。外面は露胎である。内面は淡い茶色を帯びた透明釉がかかる。貫入がみられる。257は高台径4.6cmを測る。内面、及び壘付は露胎、外面、及び底部には青みをもった透明釉がかかる。258は高台径5.9cmを測る。高台は高く、V類である。釉は茶色に汚れた透明釉である。底部、及び高台は露胎である。貫入がみられる。

青磁・皿 (255) 底径4.0cm、現存高1.5cmを測る。底部は露胎である。内面と体部外面には緑色を帯びた釉がかかる。外面には貫入がみられる。内底部にへら片彫の雲文と櫛描文がみられる。龍泉窯系と思われる。

黒色土器・椀 (259・261) 259は黒色土器A類である。高台径8.7cm、現存高2.1cmを測る。内面は黒色、外面は淡茶褐色を呈する。10世紀頃。261は黒色土器B類である。現存高1.5cmを測る。内外面とも黒色にいぶしを施す。

瓦質土器・鉢 (260) 口縁部の内側に低い三角形の突帯を設ける。内外面は磨滅している。

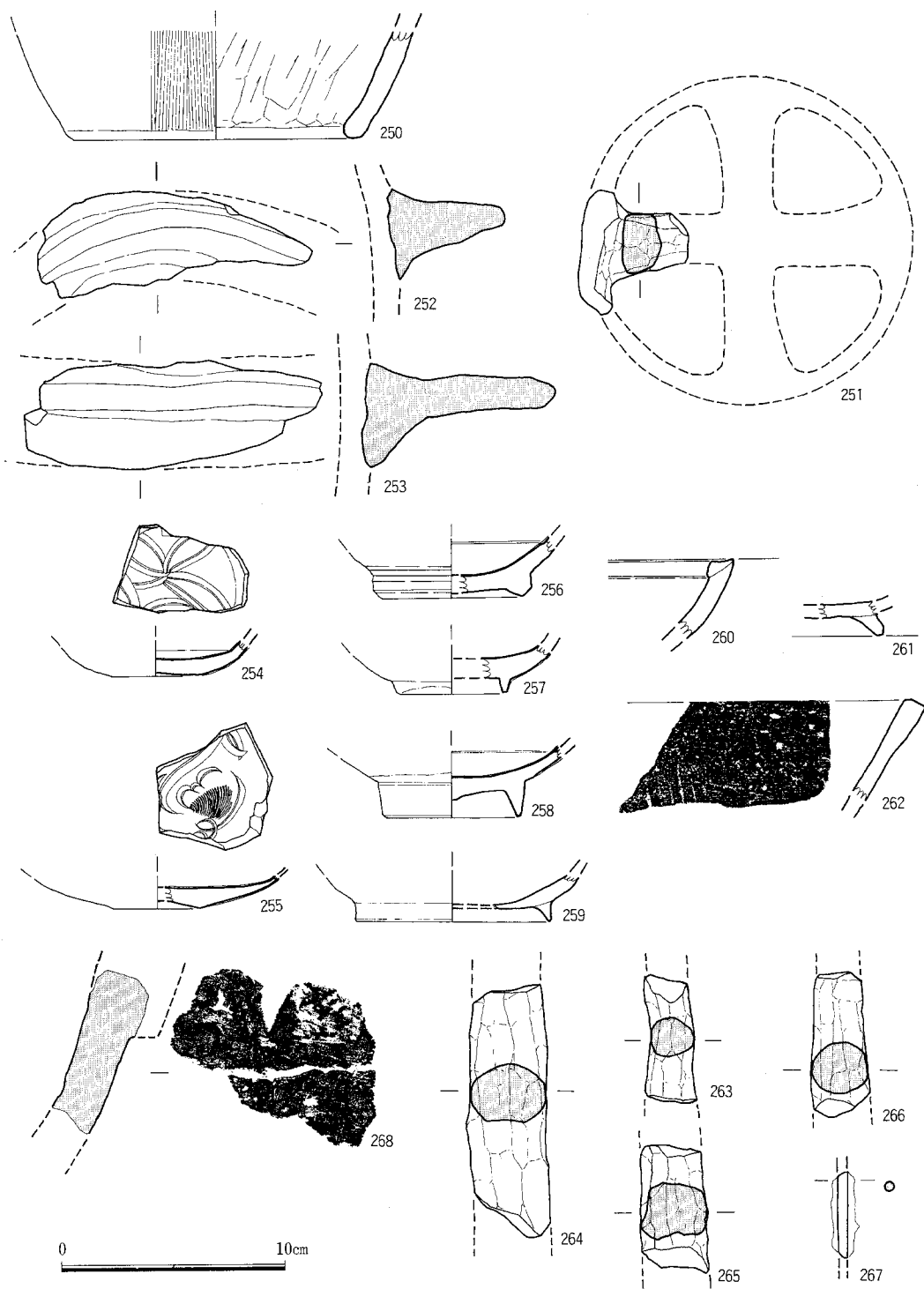


Fig.26 整地層出土遺物実測図⑧ (縮尺1/3)

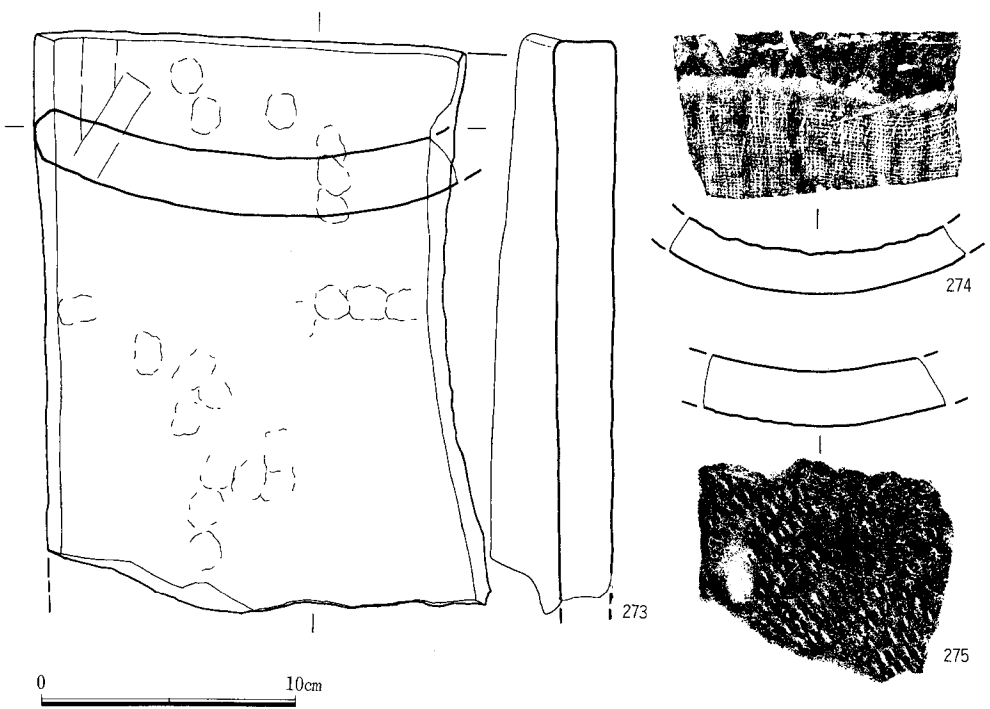
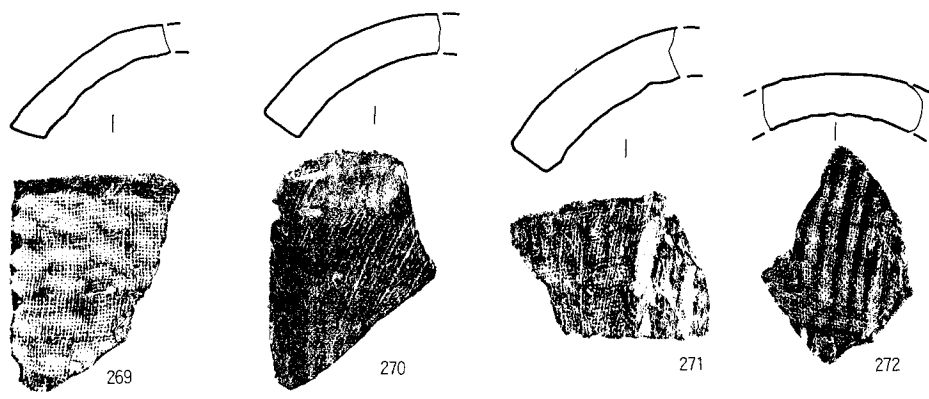


Fig.27 整地層出土瓦類実測図 (縮尺1/3)

土師質土器・摺鉢 (262) 口縁部片で、端部を肥厚させる。現存高4.6cmを測る。内面に5本単位の下し目がみられる。外面はナデ調整である。

製鉄関係遺物 (264~266) いずれも先端・基部を欠くため全長は不明。丸みをもった方柱状を呈しており、全面に指頭圧痕が残る。現存長は264が11.5cm、265が5.7cm、266が6.6cmを測る。外面はナデ調整である。

鉄製品・釘 (267) 頭部と先端を欠く。断面形は円形である。現存長3.8cm、断面の径4mmを

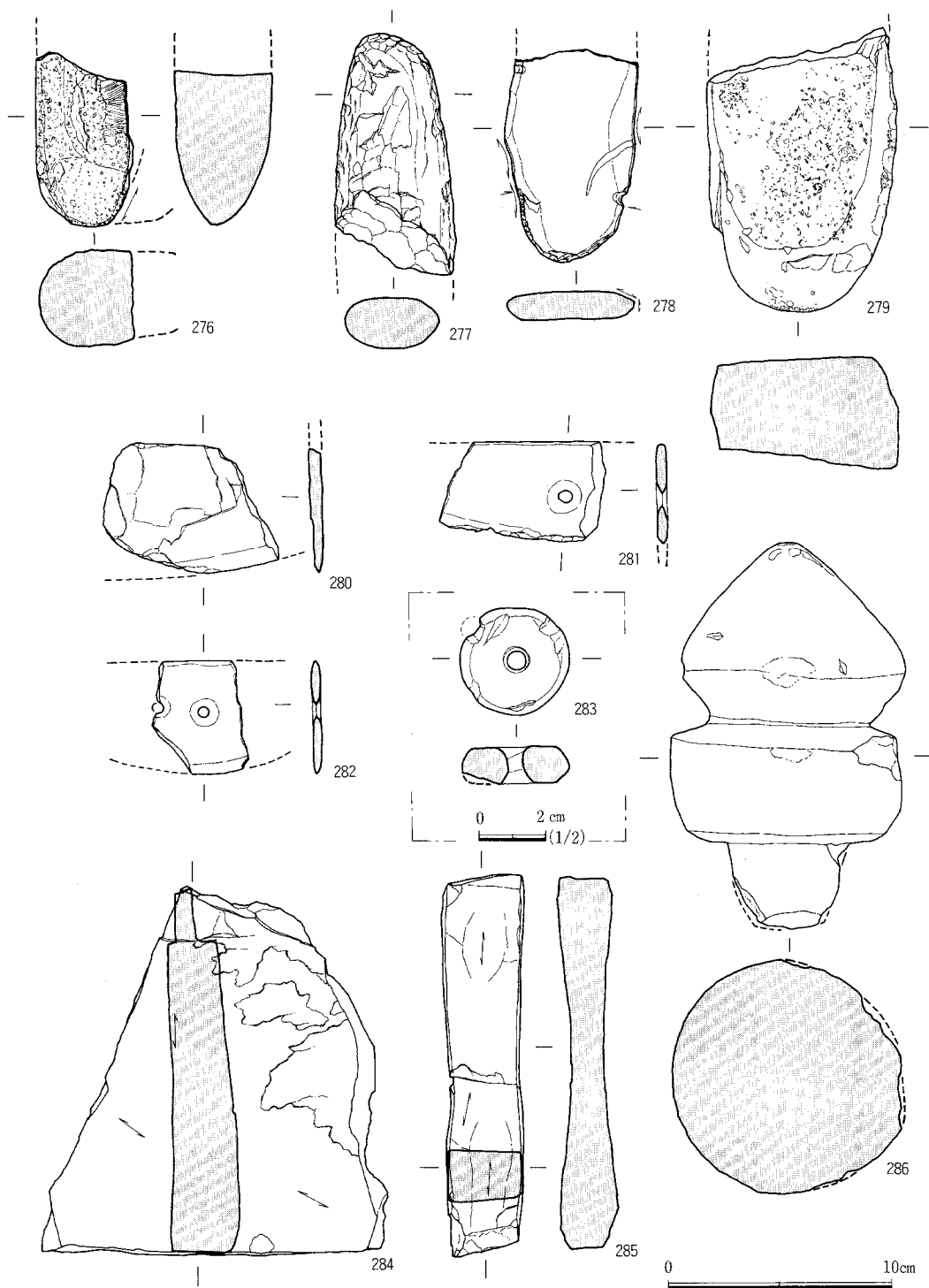


Fig.28 整地層出土石製品実測図 (縮尺1/2・1/3)

測る。錆化が著しい。

瓦類・丸瓦 (269～272) 269は高さ4.5cm、厚さ1.3cmを測る。谷部には布目痕が残る。270は須恵質の瓦である。弧深5.0cm、厚さ1.7cmを測る。谷部は布目の上にハケ調整を施す。271は厚さ2.0cmを測る。谷部には布目痕が残る。272は厚さ1.6cmを測る。谷部は布目痕が残る。

平瓦 (273～275) 273は厚さ2.4cm、弧深1.8cmを測る。背部には縄目痕、谷部には指頭圧痕が残る。274は須恵質の瓦である。厚さ1.8cmを測る。谷部には布目痕が残る。275は厚さ2.1cmを測る。背部には布目痕が残る。

石製品・石鍋 (268) 石鍋片で、厚さ2.0cmを測る。外面のケズリ痕は明瞭ではない。縦長の耳が付く器形である。滑石製。

石斧 (276・277) 276は大型蛤刃磨製石斧の再加工品である。現存長7.9cm、現存幅4.4cm、厚さ4.4cmを測る。玄武岩製。277は刃部を欠き、現存長10.8cm、最大幅5.4cm、厚さ2.5cmを測る。蛇紋岩製の磨製石斧である。

石錘 (278) 現存長9.8cm、幅5.9cm、厚さ1.3cmを測る。四方に組掛りの抉入部を設けている。蛇紋岩製。

叩き石 (279) 現存長12.9cm、幅8.6cm、最大厚5.2cmを測る。A面・B面と右側面を叩き面として利用し、下端の小口を叩き石として利用する。SD03出土の擦り石と接合する。変成岩である。

石庖丁 (280～282) いずれも著しく破損している。282は現存長7.4cm、幅4.6cm、厚さ5mm、孔径6mmを測る。281は現存長4.3cm、厚さ4.5mm、孔径5mmを測る。280は現存長7.9cm、幅5.8cm、最大厚6mmを測る。280と282は粘板岩製である。

紡錘車 (283) 径3.3cm、厚さ1.1cmを測る。中央に径8mmの穴がある。滑石製。

砥石 (284・285) 284は最大長16.8cm、最大幅15.5cm、最大厚3.1cmを測る。A面を砥面として利用する。粘板岩製。285は最大長17.4cm、最大幅3.8cm、最大厚2.6cmを測る。4面を砥面として利用する。粘板岩製である。

青銅製品・鏡 (288) 直径3.6cm、厚さ1.0～1.5mmを測る。背面中央に径5mm、高さ3mmの紐をもつ。背面に文様がある可能性があるが、腐食が著しく、且つ大きく破損しているため不明である。

そのほか整地層からは鉄滓、国産陶器片、黒曜石片、焼土塊などが出土した。

(6) その他の遺物

石塔 (286) 五十川字上屋敷所在の進藤氏宅において採集したもので、五輪塔の空輪部である。下部に差し込みの茎子を作り出している。高さ17.6cm、最大径10.4cm、厚さ10.7cm、茎子の長さ3.8cm、径5.4cmを測る。砂岩製である。

第5章 まとめ

1. 今回の調査では縄文時代から鎌倉時代までの遺構、及び遺物を検出することができたが、特に整地層から多量の奈良時代～平安時代の土師器・須恵器と共に布目瓦が出土したことは、注目に値する。これらの遺構、及び遺物については以下のような時代ごとに大別することができる。

第1期 縄文時代晩期

SK35が該当する。夜臼式土器を伴う。

第2期 弥生時代

明確な遺構は確認できなかったが、SK33が該当すると思われる。出土した弥生式土器は細片のため、時期は特定できない。

第3期 古墳時代初頭（4世紀前半）

SD06が該当する。

第4期 古墳時代前期（4世紀～5世紀前半）

SK01・SK31・SK37・SD05・SD07が該当する。土師器を伴う。

第5期 古墳時代後期（6世紀後半）

SD01・SD04・SD09・SD11が該当する。須恵器を伴う。

第6期 奈良時代～平安時代前期（8世紀中頃～9世紀前半）

SD30・SK38が該当する。

第7期 平安時代中期（10世紀）

SD03・SD10が該当する。

第8期 平安時代末～鎌倉時代（11世紀末～12世紀代）

SE01が該当する。

このように五十川赤目遺跡では縄文時代晩期から平安時代までの遺構が確認された。このほか、整地層から弥生時代前期、及び中期の土器片、中世の陶磁器・土師器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・石鍋などが出土しているが、これらに伴う遺構は確認できなかった。隣接する第2次調査では弥生時代前期の竪穴式住居跡、中世の溝跡・掘立柱建物跡が確認されているため今回の調査区にもその時代の遺構があった可能性はある。

2. SK38あるいは整地層から平瓦・丸瓦が出土した。これらは共伴の遺物により8世紀～9世紀と推定される。周辺では五十川高木遺跡で出土例があり、これは12～13世紀と考えられている。2次調査では奈良時代の梁行3間×桁行5間で、側柱だけの掘立柱建物が検出されており、この地域において瓦葺き建物の存在が十分に考えられる。建物の性格や五十川遺跡の位置付けについては今後の課題である。その他、周辺地域では三宅廃寺（7世紀後半～8世紀前半創

建)、那珂遺跡群第22・23次調査地点（7世紀後半～末）、井尻B遺跡などで瓦が出土している。

3. 第2次調査では古墳時代後期の住居跡から鉄滓が出土し、報告書も周辺地域に製鉄関連の遺構のある可能性を示している。今回の調査では遺構は確認できなかったが、整地層内から製鉄に関連して使われたと思われる土製品、及び鉄滓が出土した。

4. SK38からは基石と思われる石製品が出土した。碁が日本に渡来したのは、8世紀頃といわれる。これまで太宰府市の五条遺跡から鎌倉時代の碁石、下関市の秋根遺跡から平安時代の碁石、広島県草戸千軒町遺跡第44次調査で14世紀の碁石が見つまっている。SK38は8世紀後半～9世紀前半の遺構と考えられることから、もっとも古い出土例の一つと言える。瓦の出土と合わせて五十川遺跡には官衛的な建物かもしくは官吏の住居としての建物があった可能性がある。

5. 前述したように五十川遺跡群ではこれまでに発掘調査例が少なかったこともあり、遺跡の性格は断片的にしか判らなかつたが、今回の発掘調査結果、及び第2次調査の調査結果を考えると、その一端を垣間見ることができる。すなわち、五十川遺跡群の形成開始時期は縄文時代晩期に始まる。この時期は当該地の東方1.2kmに位置する板付遺跡において稲作が開始された時期に相当し、また、北約1kmの那珂遺跡群に環濠が作られた時期に合致する。弥生時代には前期から後期までの遺物が出土しているが、遺構は少ない。本格的に居住が始まるのは古墳時代の初頭、布留式土器に代表される時期である。SD06に続き、SK01・SK31・SK37・SD06・SD07などのように遺構の数が増加し始める。8～9世紀の須恵器、土師器、瓦の出土状況と掘立柱建物の存在は五十川高木遺跡も含めてこの地域における拠点的な集落、又は官衛的建物群が周辺に存在したことを示している。

以上、五十川遺跡について概括したが、資料が少ないため今後に課題を残した。五十川地区はすでに宅地化が進み、それに伴い遺跡の破壊も進んでいると思われるが、今後の発掘調査に期待したい。

参考文献

- 『福岡市中部地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第111集 1984 福岡市教育委員会
- 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集 1975 福岡市教育委員会
- 『秋根遺跡』 下関市教育委員会 1977
- 『草戸千軒町遺跡 第44・45次発掘調査概要』 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1990
- 『五十川野間遺跡』 五十川野間遺跡調査会 1982
- 『那珂遺跡3』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第253集 1991 福岡市教育委員会
- 『那珂遺跡4』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集 1992 福岡市教育委員会
- 『三宅廃寺』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集 1979 福岡市教育委員会

Tab. 2 五十川遺跡第1次調査遺構一覽表

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形		規		出土遺物	時代	備考
			平面形	断面形	長	幅 (cm)			
SK01	P 1	土塋	不整形	逆梯形	73	69	23	弥生土器(甕・甌把手)、土師器(碗・甕・高坏)	
SK02 SK29	欠								
SK30	P30	土塋	不整形	逆梯形	76	70	48	弥生土器、土師器(高坏・甌把手)、須惠器(坏・蓋)、須惠器生焼(皿・坏・蓋)、須惠器赤焼	
SK31	P31	土塋	不整形	逆梯形	70	64	39	弥生土器、土師器(甌)	
SK32	欠								
SK33	P33	土塋	不整形	逆梯形	$(+\sigma)$ 91	93	14	縄文土器(甕)、弥生土器	
SK34	欠								
SK35	P35	土塋	不整形	逆梯形	133	97	33	縄文土器	
SK36	欠								
SK37	P37	土塋	不整形	逆梯形	91	62	36	土師器、土製品(勾玉)	
SK38	P38	土塋	不整形	逆梯形	$(+\sigma)$ 242	$(+\sigma)$ 60	30	縄文土器、弥生土器(甕)、土師器(皿・坏・甕・高坏・鉢・カマド型・甌把手)、手捏土器(碗)、須惠器(皿・坏・蓋・甕・高坏脚・鉢・壺)、須惠器生焼(坏・蓋)、須惠器赤焼(甕)、黑色土器(坏)、青磁(碗)、製鉄遺物、瓦(丸瓦)、石製品(砥石・黒曜石・基石)	境界地にある
SE01	P04	井戸	不整形	摺鉢状	270	225	124	弥生土器(甕)、土師器(皿・坏・甕・壺・甌)、須惠器(坏・蓋・壺)、須惠器生焼(坏)、瓦(平瓦)、石製品(砥石)	
SD01	M 1	溝			$(+\sigma)$ 1670	41	11	土師器(高坏・壺)、須惠器(甕)、須惠器生焼	
SD02	M 2	"			2000	46	15		
SD03	M 3	"			5260	95	29	縄文土器、弥生土器(高坏・壺)、土師器(皿・坏・甕・高坏・壺・カマド型・甌)、須惠器(坏・蓋・甕・壺)、須惠器生焼(坏・蓋・碗・大甕)、須惠器赤焼、内黒土器(碗)、鉄製品、石製品(砥石)	
SD04	M 4	"			1890	57	18	弥生土器、土師器、須惠器(蓋)	
SD05	M 5	"			$(+\sigma)$ 860	62	17	土師器	境界地にある
SD06	M 6	"			2520	$(+\sigma)$ 120	20	縄文土器(甕・鉢)、弥生土器(碗・甕・鉢・壺・甌)、土師器(碗・蓋・甕・埴・高坏・壺・甌)、手捏土器(壺)、須惠器、土製品(紡錘車状)、石製品(砥石・石剣・紡錘車)、黒曜石、軽石	
SD07	M 7	"			3700	300~1000	50	土師器	
SD08	M 8	"			150	18	3		
SD09	M 9	"			284	137	10	土師器(高坏)、須惠器、須惠器生焼(甕)	
SD10	M10	"						弥生土器(甕)、土師器(坏・碗・甕・高坏・鉢・壺・甌把手)、須惠器(坏・蓋・甕・高坏・壺)、須惠器生焼(坏・蓋・甕・壺)、須惠器赤焼(坏・蓋・甕・壺)、染付、瓦(平瓦)	
SD11	M11	"						弥生土器(甕)、土師器、須惠器(蓋)、鉄製品	
SP02			隅丸方形	逆梯形	45	39	20	土師器(高坏)、黒曜石	
SP03			隅丸方形	逆梯形	37	37	20	土師器(高坏)、須惠器(甕)、須惠器生焼	
SP05			不整形	逆梯形	36	30	18	土師器、須惠器	
SP17			不整形	逆梯形	45	45	17	土師器、須惠器(坏)	
SP22			不整形	—	$(+\sigma)$ 25	$(+\sigma)$ 25	17	弥生土器、土師器(高坏)、須惠器(坏・蓋)、靱羽口	
SP28			不整形	—	$(+\sigma)$ 45	47	8	弥生土器(壺)、土師器(坏・碗・高坏・甌の把手)、須惠器(甕)、須惠器生焼(坏・蓋・甕)、須惠器赤焼(蓋)、瓦(丸瓦)、サヌカイト片	
SP32			隅丸長方形	逆梯形	50	37	17	弥生土器、土師器、須惠器(坏・蓋・壺)、須惠器生焼(坏・蓋)、石製品(石斧)	

図 版



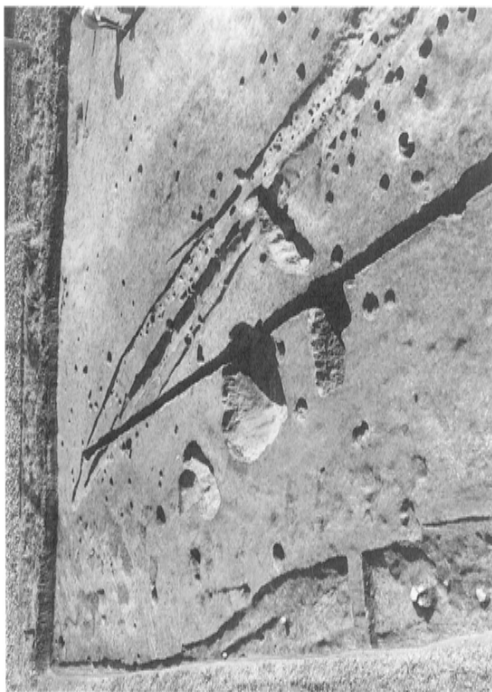
五十川遺跡第1次調査発掘作業風景



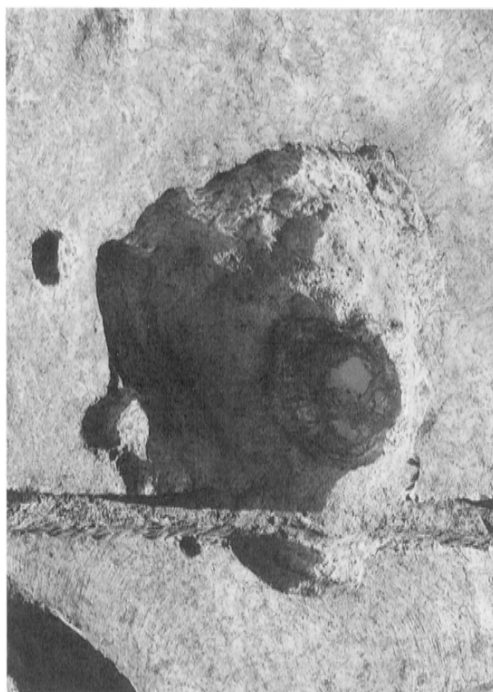
(1) 北側調査区全景 (南から)



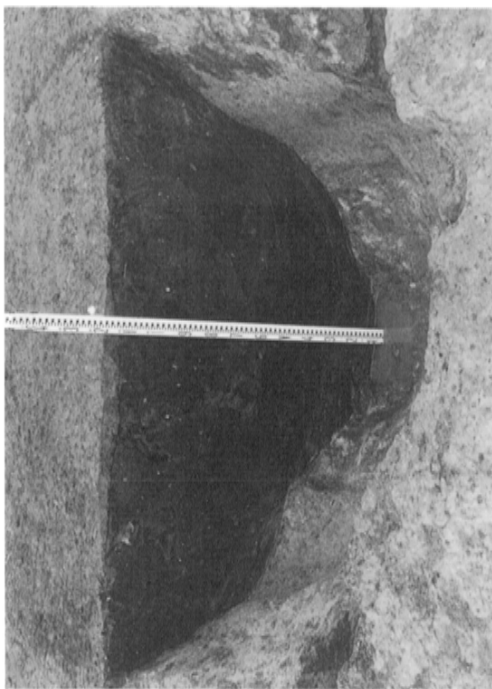
(2) 南側調査区全景 (南から)



(1) 溝SD03・04・06、井戸SE01(南から)



(2) 井戸SE01(北から)



(3) 井戸SE01土層状態(東から)



(4) 井戸SE01内木製品出土状態



(1) 溝 S D 06 (北東から)



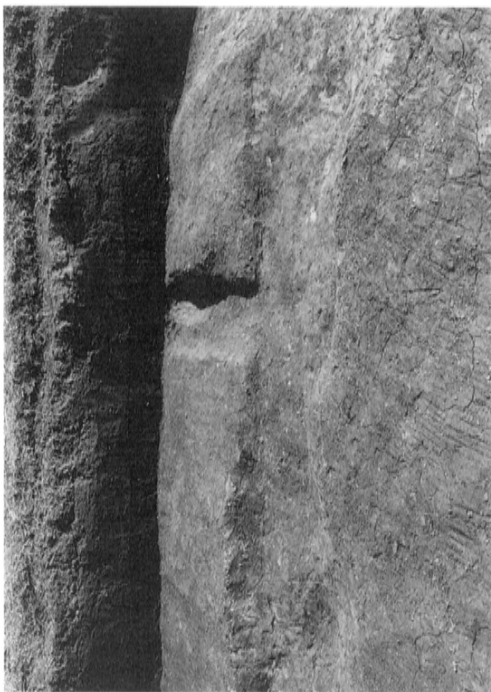
(2) 溝 S D 07 発掘作業風景 (北西から)



(3) 溝 S D 07 (北から)



(4) 溝 S D 07 土層状態 (南から)



(1) 溝 S D 05 (西から)



(2) 南側調査区作業風景 (西から)



(3) 南側調査区遺構群 (南から)



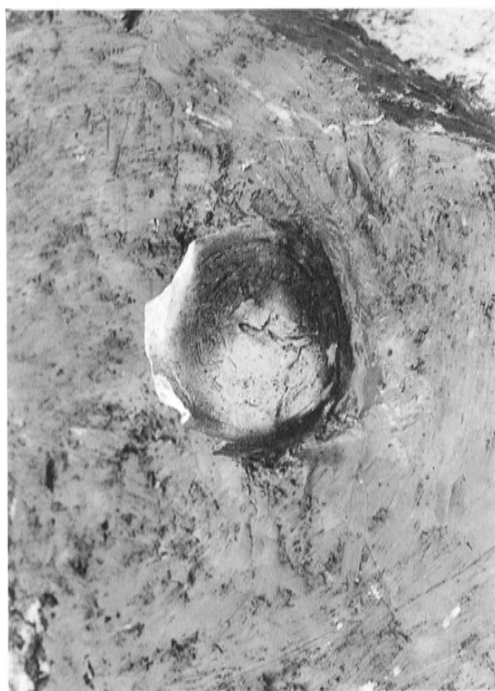
(4) 溝 S D 03・10・11、土壌 S K 38 (北から)



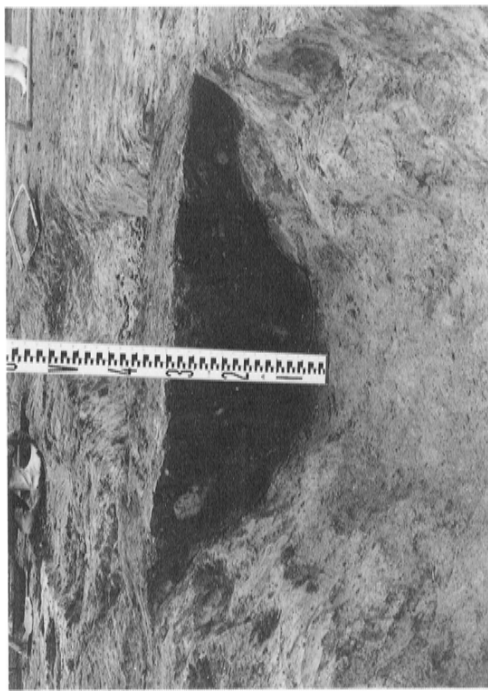
(1) 溝 S D 10 (北から)



(2) 溝 S D 10 内遺物出土状態 (東から)



(3) 溝 S D 10 内出土須恵器蓋 (南から)



(4) 溝 S D 10 土層状態 (北から)



(1) 土壙S K 35 (南から)



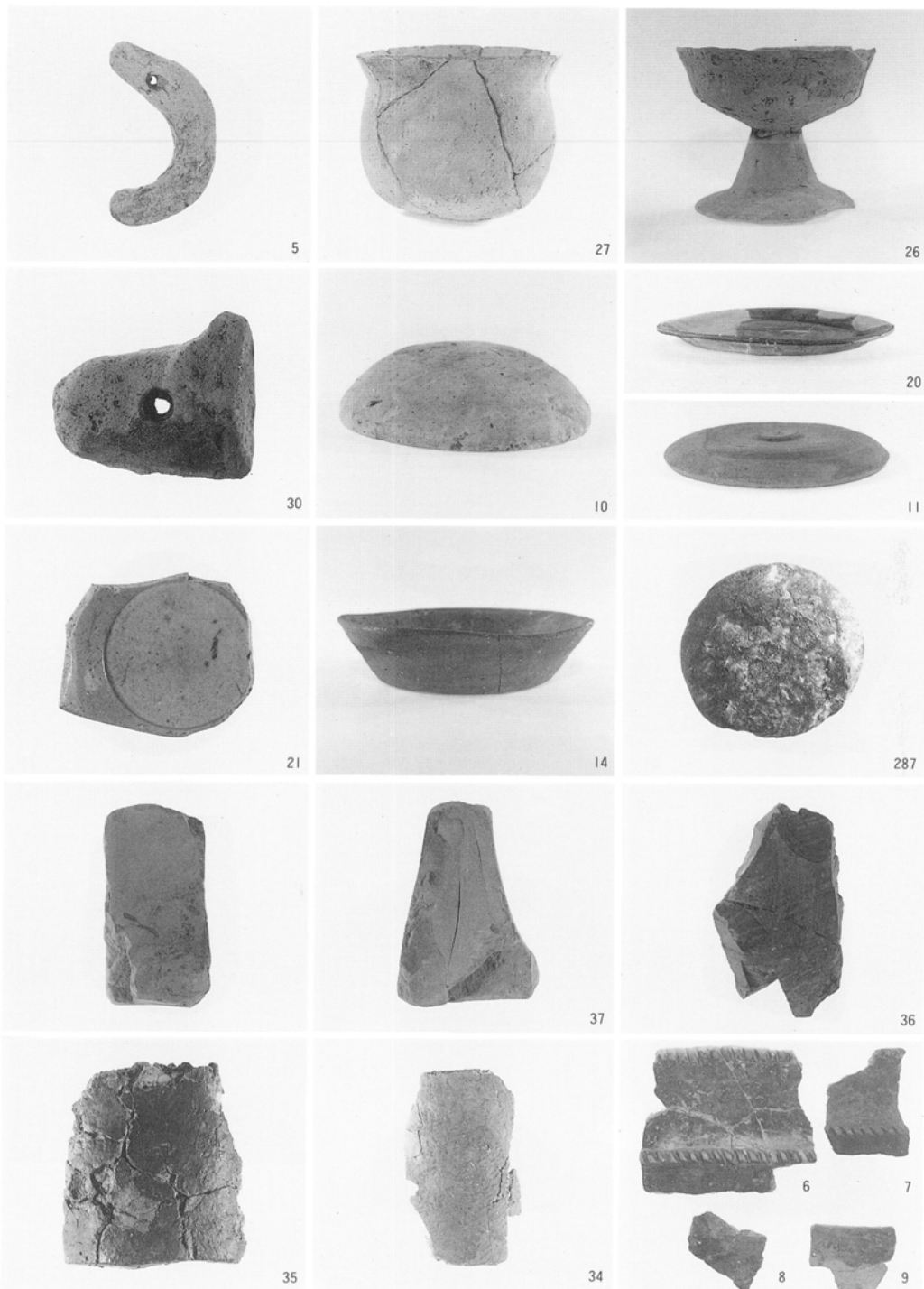
(2) 土壙S K 35内遺物出土状態



(3) 土壙S K 38 (東から)

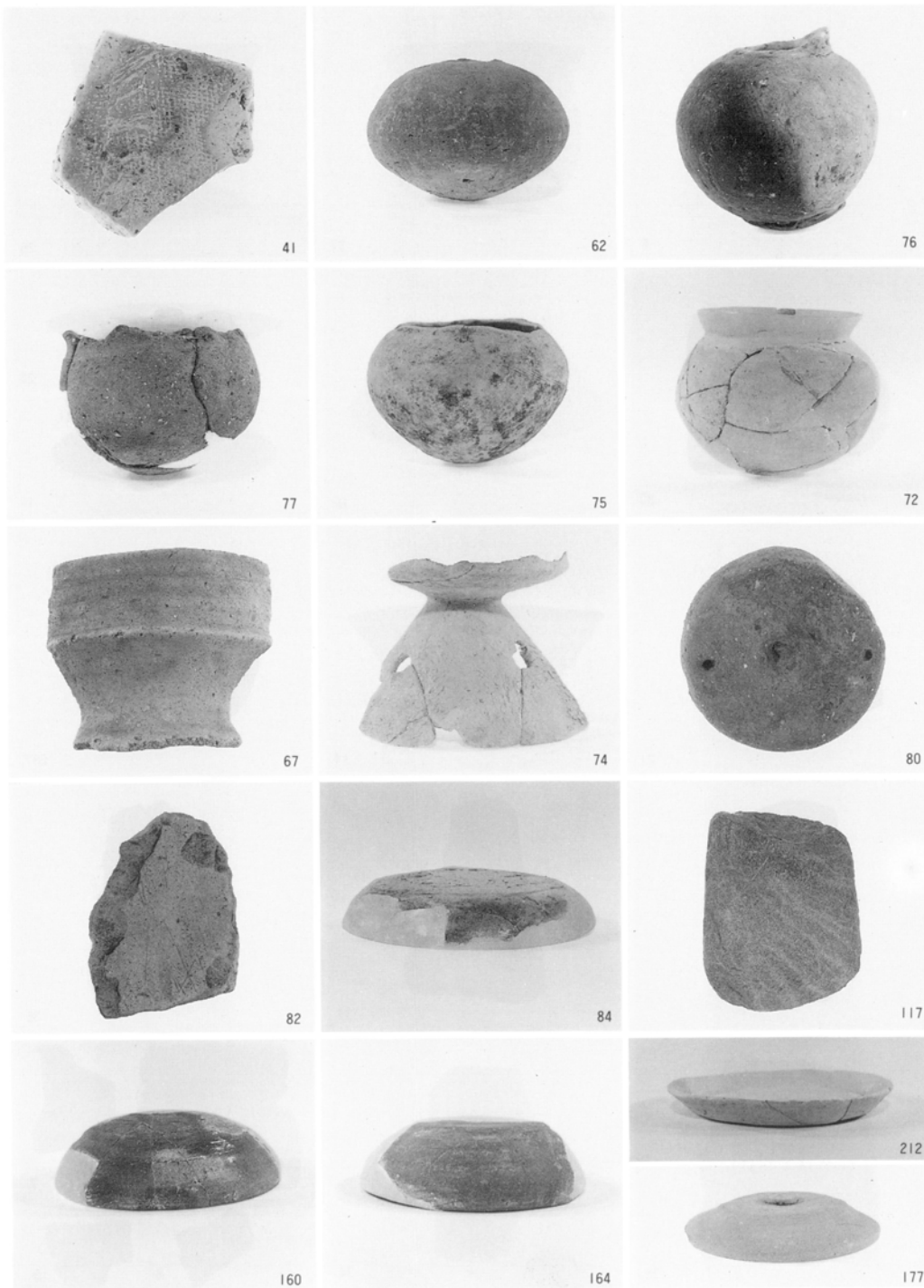


(4) 整地層内遺物出土状態 (西から)

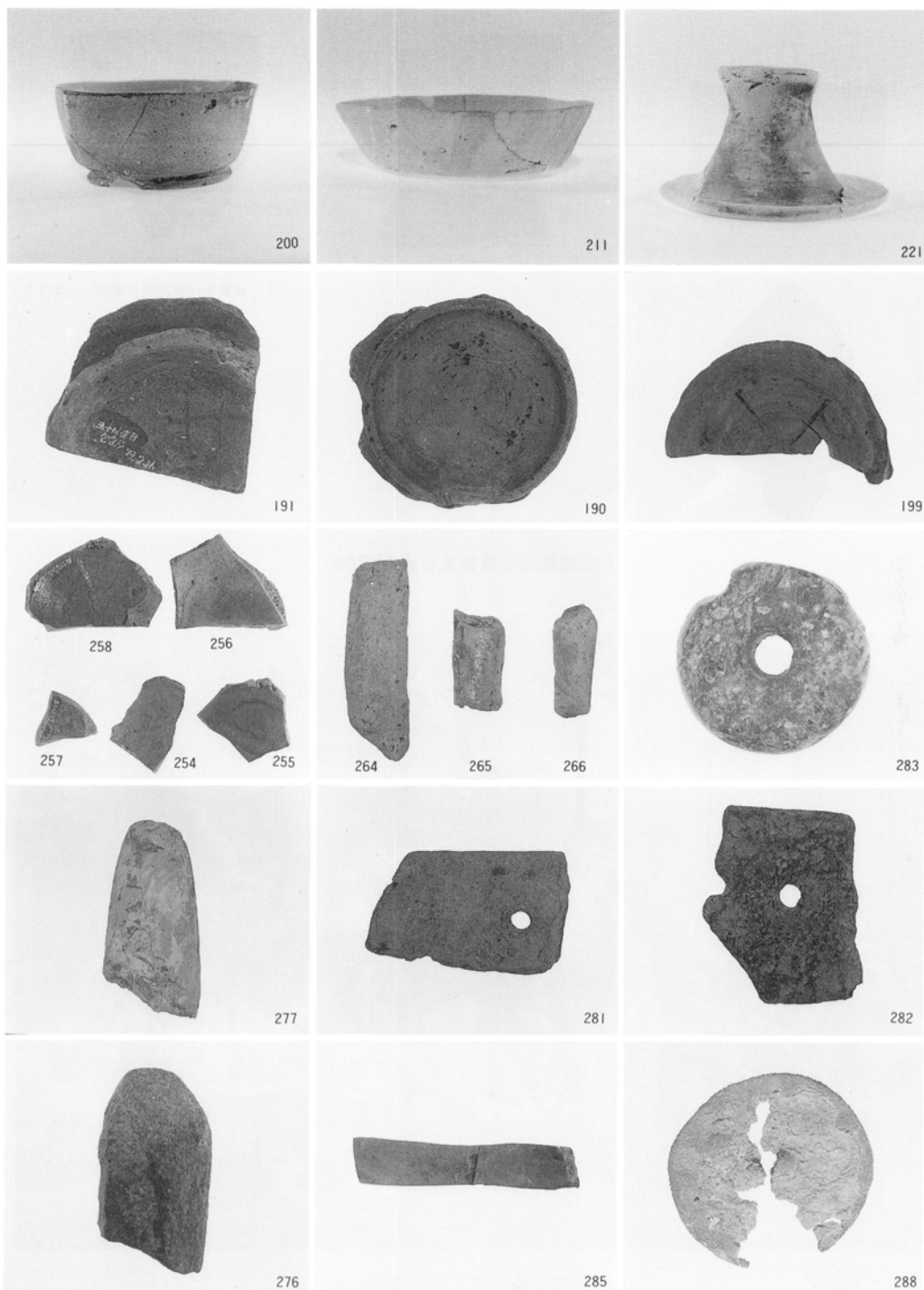


土壙 (SK) 出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する



井戸 (SE)・溝 (SD)・整地層出土遺物

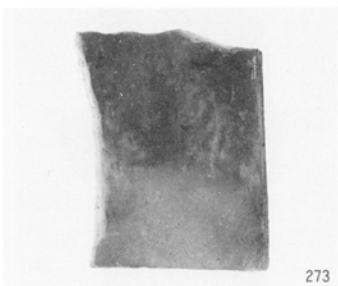


※数字は実測図の番号に一致する

整地層出土遺物



274



273



284

※数字は実測図の番号に一致する



286

(1)整地層出土遺物及び表採遺物



(2)発掘調査協力者及び作業員の皆さん

福岡市埋蔵文化財調査報告書第363集

五十川 赤目遺跡

平成6年(1994)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 寿印刷株式会社
福岡市西区小戸4丁目5-42
